
英雄伝説～龍の軌跡FC～

機甲の拳を突き上げる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

英雄伝説〱龍の軌跡FC〱

【Nコード】

N76660

【作者名】

機甲の拳を突き上げる

【あらすじ】

今回のクロスは英雄伝説「空の軌跡」と「零の軌跡」でクロス作品はXbox360作品「ニンジャガイデン2」で制作していきます。長丁場になり更新も亀ですが楽しみに見て頂けたら幸いです。

プロローグ（前書き）

どうも機甲の拳を突き上げるです。

これの他にリリカルなのはクロスも書いてるので
読んでいただけたら幸いです

プロローグ

これは日本を守護せし一族、龍の末裔である隼一族の超忍リュウ・ハヤブサの物語である。

隼一族と怨敵である地蜘蛛一族の首領・幻心^{げんしん}、邪神を復活せんとする四殺重鬼王との死闘、さらに復活した邪神との死闘の末に勝利した超忍リュウ・ハヤブサは里の復興に尽力を注いでいた

「リュウ様」

里の復興が粗方終わり戻ろうとしていた所紫の髪をしたくノ一、あやねがいた

「あやねか……」

リュウは後ろを見ずに気配だけで人物を当てた

「ジョウ様がお呼びしております」

「そうか」

リュウはあやねの後について行き父であり隼一族の現頭首ジョウ・ハヤブサの元に向った

「きたか」

ある屋敷の中に体に包帯を巻いているジョウ・ハヤブサはいた

「何用だ親父」

「うむう、実は龍の祠を警邏していた忍達が不思議な声を聞いたと報告があつてのおお前に調べてもらいたい」

話の内容を聞きリュウは何か考えているようだ

「その声とは？」

「それが声を聞いた者達は皆内容を覚えておらんだ」

確かにそれは不可思議だとリュウは心の中で思った

「御意に、調べてくる」

「頼んだぞリュウ」

リュウは屋敷を出て龍の祠の方へ向う途中にあやねがいた

「どうした？」

「・・・何か不吉な予感がいたします、どうかご同行をお許してください」

しかしリュウは首を横にふった

「様子を見に行くだけだ心配いらん」

「なら・・・これを」

あやねから渡された物、それは握り飯と龍の勾玉だった

「これは！何故お前がこれを？」

「ジョウ様に今の内容をお話しましたらコレをリュウ様にと」

「そうか・・・助かる」

リュウは握り飯を袋の中にいれ勾玉を懷の中に納めた

「どうか・・・ご用心を」

そしてリュウは祠に向った

祠に着くと何やら女性の声が聞こえてきた

「こんな所で声・・・里の者ではない・・・」

リュウもこの現象に警戒しながら祠の中を進むと社やしろの中に置かれて
いる龍の鏡が光っていた

「！？、なぜ鏡が！」

そしてまた女性の声が聞こえてきリュウは龍剣に手をかけた、そして鏡の方から凄い勢いで風が吹き吸い込んできた

「ぬ！くっ！」

リュウは必死に絶えたがそれも虚しく鏡に吸い込まれた

「！！！」

あやねはいきなり不安が襲い龍の祠の方をみた

「リュウ様！！！」

そしてあやねは急いでリュウの祠の方へ行き社の中に入るとそこには誰もいなかった・・・

プロローグ（後書き）

ふう、小説書くのはつかれるね（；＾＾）

作者の予想じゃあやねはリュウのことが好きだと思っただけだろう？

mission 1 異世界との出会い

龍の鏡に吸い込まれた後目を開けるとそこは空間全部が白としか言
いようの無い空間だった

「きて頂けましたか」

先ほどまで誰もおらず気配無しに声を掛けられリュウは龍剣に手を
掛けた

「何者だ！」

警戒を解かず鋭い目付きで睨む

「安心してください、私は敵では^{わたくし}ありません」

女性がそう言うもリュウは警戒を解かずにした

「・・・まあ突然こんなことに巻き込まれたら警戒しますよね。失
礼しました私はエイドス、女神と称される者です」

それを聞きリュウは若干顔を^{しか}顰めたが龍剣から手をはなした

「・・・女神が俺に何用だ」

リュウが龍剣から手を離れたのに安堵した表情をしたが直ぐに真剣
な表情をした

「・・・実は私のいる世界に不穏な影が生まれました、その影は年

月が過ぎるにつれて大きくなりもはや私達だけでは押さえ切れなくなりまして・・・そこででた答えが貴方様あなたさまです」

その答えにリュウは疑問を感じた

「・・・何故俺なんだ？」

「貴方様は邪神を・・・神と称される者を滅ぼした存在・・・本来神は信仰が大きければ大きいほど力を増す者、少なからず信仰がある神は莫大な力がありますそれを滅ぼした貴方様の力を借りたいのです」

その返答にリュウは目を閉じ考えた、そして

「断る」

その答えにエイドスは驚いた

「な、何故です！貴方様は今の話を聞いておりましたか！？信仰をもつ私たち神でもはや抑えきることの出来ない影が迫っているのです！」

「それはお前達の都合だ」

リュウは今の言葉に力を込めた、その言葉にエイドスは息をのんだ

「貴様達神が俺の世界の事情を知っているなら分るはずだ今の里は壊滅状態ださらに戦闘できる人数も壊滅的、頭領も負傷し里の者達は不安にあるもし地蜘蛛の残党が群れをなし里を襲ったらそれこそ終わりだ。コレが分らない貴様でもあるまい」

リュウの説明を聞きエイドス暗い顔をした正論を言われ反論できる要素が無かったからだ

「分れば今直ぐ俺を元の世界に返してもらおうか、今もし地蜘蛛の残党に襲われ里が滅んだらそれは貴様のせいだ」

リュウは追い討ちをかけるように冷たい言葉をはった

「そこまでしておいてやれ我が末裔よ」

後ろからの声にリュウはすぐさま警戒した気配を感じることがまた出来なくこれほどの失態に顔を歪めていた、そして振り向くとそこには・・・龍がいた。その姿は古くからある巻物や伝承にある姿そのものだった、そして手にかけていた龍剣と懐にある勾玉が鼓動を発しており取り出した

「ふむ・・・我が牙に我が力を込めた勾玉、どうやら正統な後継者のようだな」

言葉を聞きリュウは目の前の龍に膝をついた、その姿は忍が主人になす敬意そのものだった

「よい樂にしるエイドスの話だが受けて貰えんか？確かに里が重要なも分る、だがエイドスに薦めたのは我だ里の方は我が力を貸すゆえに行ってくれんか？」

リュウは頭をさげたまま

「御意に」

リュウは立ち上がりエイドズの方を向いた

「そちらの話を受けよう」

その言葉を聞き暗い顔が明るくなった

「感謝しますリュウ殿、影はまだ大きくなり続けておりますどうか
ご用心を後コレを」

エイドスの手から渡されたものそれは聖杯を基づいた天秤の書かれたメダルだ

「今から行く世界の王に見せてくださいその時に私の名前を言えば
いいはずです」

リュウはそれを懐にしまった

「・・・本当に申し訳ありません私達に力があれ「それ以上は言
わなくていい」・・・え？」

「俺も人が不幸になるのを見るのは好きではない、その世界に行く
には必ず世界を救う」

リュウの目を見たエイドスは何故か安心できるようになり顔が赤くな
り始めた

「どうした？調子でも悪いのか」

「い、いえ！何でもありません！」

エイドスは後ろを向き手を頬に当てていた、それを見ていた龍は表情は分らないが微笑ましいなと思っていた

「ゴホンッではお願いできませんか？」

リュウは無言で頷いた

「では」

エイドスが空間に手をやるとそこが光始めた

「この光に向ってくださいそうすれば私達の世界にいきます」

リュウは光に向って歩き始めた

「あっ！待ってください！」

リュウは首をかしげた

「コレを渡すのを忘れていました」

エイドスはリュウに赤いお守りを渡した

「これは呉葉^{くれは}さんが貴方のために作ったお守りです」

「！！！！」

その名前を聞いてリュウは驚いた顔をした。無理もない呉葉とは隼一族の龍の巫女で幼馴染であり殺された人物であるからだ

「・・・・・・・・ここに居るのか」

「いえ、でも伝言を貰ってます・・・・・・・・どうか体には気をつけてと」

「・・・・・・・・そうか」

リュウは再び光に向った歩きだしたその背中には哀愁がただよっていた、そしてリュウは光の中に入った

「・・・・・・・・」

エイドスはリュウの背中をじっと見つめていた

「惚れたか？」

「な！？」

龍がそう言つとエイドスの顔が真赤になっていた

光を抜けるとそこは炎に包まれた町だった、しかしリュウは冷静に周りを搜索していた

「エステル！！」

若い女性の叫び声が聞こえその方を向くとそこには落ちてくる瓦礫から子供を救おうとする姿が見えたと同時に全速力で走りだした

この町にエレボニア兵が押し寄せてきて急いで逃げると時計塔に砲撃され瓦礫がエステルを襲うとしているのをみて

「エステル！！」

なんとかエステルを瓦礫から救ったがもう目前に瓦礫が迫っており目を瞑った、すると行き成り体が浮遊感に襲われた

不思議に思い目を開けると10歳ぐらいの男の子かな？服全てが黒で統一されていて額には金属で覆われている頭巾を被っていた

「怪我はないか？」

喋り方が大人じみてると思った

どうやら間に合ったようだトリユウは息をついた

「お母さん！！」

ツインテールに纏めた活発そうな子供が女性に抱きついた、だがリユウは人の気配を感じその方を見ると武器を装備しているのが分り女性と子供を抱えた

「え？あの？」

「捕まっている」

リュウは瓦礫を使い比較的安全そうな屋根を見つけ素早く移動し元いた場所を見るとさっきの兵士が行き成りいなくなったのに困惑していた

「ここにいろ直ぐ戻る」

「え？まちなさ」

女性が止めようとするのをよけ屋根から屋根へと飛び手裏剣で5人中3人仕留めた、そして兵士の目の前に姿を現した

「な！このガキ！！」

兵士が銃を構えようとするがリュウが技・飛燕をし銃を構える前に首が吹き飛んだ

「ひ、ひいいい」

もう1人の兵士が逃げようとしていたがすぐさま爆破手裏剣を投げつけ爆発した、屋根の上に戻り女性の安否を確かめると無事のようにだ

「たすけてくれてありがとうおにちゃん！！」

先ほどの子供が礼を言ってきた・・・この状況で礼を言えるとはきつと大物になるなとリュウは思った

「何処か安全な場所はないか？」

「なら私達の家に来てください、森の中にあるので兵士達も追って

これないでしょ」

リュウは無言で頷くと女性達を屋根から下ろし森に向って進んでると他の兵士がいたのか此方に気づき銃を構えようとしていたのを手裏剣で仕留めた、目の前で人が死ぬのを見てなのか子供は気を失った

「……すまない軽率な行動だった」

「戦争中ですからしかたないですよ」

そのままリュウは家まで護衛し目的地に到着した

「どうもりがとうね、よかったら家でお茶飲んでいかない？」

リュウは無言で首を横に振り立ち去ろうとすると少女が目を覚ました

「待って！どこ行くのにおにいちゃん！？」

少女はリュウの腕から離れようとしなかった

「エステルってば大胆ね この子の言うとおりまだ外は危険だしここも何時まで安全か分からないから護衛してくれないかしら？」

リュウは少し考え頷いた

「そういえば自己紹介がまだだったね。私はレナ、レナ・ブライトよ」

「あたしはエステル」

2人が意気揚々と自己紹介してきた

「
・
・
・
・
・
リュウ・ハヤブサだ」

mission1 異世界との出会い（後書き）

はあゝ疲れた

自分に中じゃリュウは頭は冷静で心は修造だと思っていますwww
やべえ・・・ヒロインだれにするかな

mission 2 体が・・・

リュウがエステル達の家には護衛した後、講和条約締結が成された。

ここリベール王国軍もそれに安堵していたがたった一人飛行艇の中でブツブツと女神に祈りを捧げている男の姿があった

その男とはとつつあ・・・カシウス・ブライトである。彼は王国軍大佐であり百日戦役で帝国軍に一大反攻作戦を考え決行し見事勝利を掴んだ英雄であり>>剣聖<<と称される男でもある

その男がなぜ飛行船で縮こまってるかというとロレントが帝国軍に襲撃され破壊された時計塔の近くに自分の妻子がいたと報告がきたからである

飛行艇が近くの基地に着陸すると同時にカシウスは飛び降り鬼気迫る勢いで我が家に走っていった同日に基地にいた兵士達は口を揃えてこう言った

「あんな顔をした大佐は初めてみた」

と体を震わせていた

道の邪魔をしていた魔獣は文字どおり蹴飛ばして行き家と町の二又道まで着き後は家まで後一直線だと意気込みトップスピードで走ろうとした、だが何かが足に引っかかり近くに木に吊るし上げられた

「なっ！」

そして吊るし上げられたカシウスに大量の矢が降り注がれた

「くっ！」

腰に帯剣していた剣で矢を払いのけロープを切り地面に着地した、しかしそれと同時に上から岩が降ってきてそれを避けようと横に飛び着地したらまた木に吊るされた

「む」

庭で薪をこしらえている少年リュウ・ハヤブサ、そう少年である

リュウが家まで護衛しその後お茶をご馳走になった、だがその前からリュウは違和感があった・・・そう視線が低いのだそして何故か手足も短くなっているのだ。兵士の殺そうと飛燕をしようとした時に体の変化に気づき失敗しかけたぐらいだ

リュウはレナに鏡が無いか聞き風呂場にあると聞き鏡を見ると・・・そこには幼年期のリュウの姿がありその姿を見た本人は余り驚いていなかった。彼の心にあるのはエイドスへの怒りだけだろう

そしてリュウは自分より年上のレナには敬語をつかうようにしていた

「レナさん」

「あらお帰りリュウ君薪割りご苦労様。今冷たいもの入れるわね」

レナは飲み物を入れようとしていたがそれをリュウは止めた

「侵入者です、それかなりの腕を持っています、あの子は？」

「エステルなら今部屋にいるけど」

「なら一緒に部屋にいてください、撃退してきます」

リュウは龍剣を取り出し背中にしまい家を出ようとしたが

「ちょっと待って」

レナに止められた

「もう戦争も終っから多分あの人だとおもっわ」

それを聞きリュウは疑問に思った

「確か旦那さんは王国軍大佐ではありませんでしたか？それなら直ぐに帰ってくるのはありえないかと今頃は事後処理に追われているはずです」

リュウの説明を聞いてもレナはニコニコしていた

「でもあの人のことだから・・・」

とリュウとレナが話合いをしていたら上からエステルが降りてきた

「どうしたのお母さん？」

「もしかしたらあの人が帰ってくるかもって話していたのよ」

するとエステルの顔が物凄い笑顔になった

「お父さん帰ってくるの！」

また話合いが始まるとおもったらリュウは玄関の方を向いた

「どうしたの？」

エステルが首を傾げてきくと

「・・・もう直ぐそこまで来てる」

そしてリュウは玄関から飛び出した、それにつづきエステルとレナも外にでた、すると道の方に緑の軍服がボロボロになり剣を杖がわりにしているカシウスの姿があった

「お父さん!!」

カシウスは物凄い勢いでリュウ達の方をみた

「レナ！エステル！」

腕を広げ勢いよく走ってくるカシウス・・・・・・・・だが

「ぬおっ!!」

落ちた。いきなり目の前からカシウスが消え不思議に思ってるエステル

「ふむ、流石に気づけなかったか」

その言葉にエステルは首をかしげた

「落とし穴を設置していた」

そっくりリユウとエステルは落とし穴の方に向った、エステルが穴の中を覗くとボロボロのカシウスがいた

「お父さん大丈夫？」

その言葉にカシウスは目を覚ました

「エステル！どこか怪我してないか！？」

「うん！あたしは元気だよ！」

エステルは力こぶをつくるポーズをしていた、すると穴の中にロープがたれてきた。そのロープを使いカシウスは落とし穴から脱出、見事家までたどり着いた

「レナ！無事か！」

穴を出て直ぐにカシウスはレナの安否を確かめた

「はい無事ですよあなた」

レナのいつもの笑顔を見てカシウスは心の重荷が降りた感じがした

「だが時計塔が崩落する時に近辺にいたとか聞いたが」

レナは無言で頷きその時の状況を説明し始めた。エステルと家に逃げる途中時計塔の側にいた時砲撃で時計塔が破壊され瓦礫に生き埋めになる所リュウに助けられ、その時に攻めてきた帝国軍から家まで護衛してもらってそのお礼と私達の護衛を兼ねてこの家に滞在させているなど

「そうか・・・」

カシウスはリュウの方を向き深ぶかと頭を下げた

「妻と娘を助けてくれて本当にありがとう。」

その姿にリュウは首を横に振った

「人として当然のことをしただけです。礼を言われる筋合いはありません」

「それでも礼を言わせてくれ」

リュウは無言で頷いた、その姿にカシウスは満足そうな顔をしていた

「さてあなた、そろそろ晩御飯が出来ますから食卓でお話したらどうです？」

「おお！そうか、久々の手料理だ期待するよ。さあリュウ君もきたまえ」

無言で頷きリュウはカシウスにつづいて食卓に向った。夕食後カシウスはエステルを部屋で寝かせレナとリュウのいる居間に向った

「またせたね、じゃあ話を聞かせてもらえるかな？君は相当な実力者のようだ」

「それは貴方もですね、正中線にまったくブレがなく足運び1つ無駄がない何よりはy・・・気配が違う。それに手の平にある剣ダコは一朝一夕では身につかないモノだ」

カシウスは相当驚いた顔をしていた。エステルより少し年上の少年にそこまで見抜かれ恐ろしいほどの慧眼に関心していた

「では単刀直入にきく、君は何者だ？」

リユウは目を閉じ少し考えた後目を開いた、その目は超忍リユウ・ハヤブサの目だった

「異世界の住人といえば信じるか？」

カシウスは啞然な顔をしていた、ラッセル博士からはそんな話を聞かされた記憶があるがどうも御伽噺としか考えなかった。そしてリユウの話を聞き半信半疑が確実なモノに変わった

リユウがおこなってきた事柄、彼は龍の末裔である隼一族で頭首の息子であり実際の年は23であり彼の一族の怨敵である地蜘蛛一族と邪神復活しようとする四殺重鬼王と数多の魔物達、そして復活した邪神を彼は実質1人で解決したと聞いた時は自分の耳を疑った、しかし彼から発する気迫には何か信じさせるモノがあった。そして彼は机の上に1つのメダルを取り出したそれには七曜協会のマークが彫られておりこれほどの精度をもつ物は初めて見た

「これはエイドスという女神から渡された物だ」

この言葉には妻も声が出なかった、

「エイドスとは・・・あの>>空の女神<<のエイドスか？」

「奴自身が女神と名乗っていたが実際は分らん、がそのメダルを見せれば分ると言っていた」

どうやら彼は女神に選ばれた戦士みたいだ

「・・・それで君はこれからどうするのかね？」

「まずこの国の王に会いに行く奴が会えと言っていたからな」

カシウスは何かか考えている表情をした後なにか決心した顔つきをしていた

「・・・なら私が紹介しよう」

その言葉にリュウは少なからず驚きを露^{あらわ}にしていた

「・・・こんな話を信じるのか」

「確かにまるで御伽噺のような話だがこの世界にない機械に君の気迫、そしてこのメダルだ信用できる要素が多々あるからな、それとも・・・」

カシウスの気配が変わった

「女王陛下を殺すため・・・かね」

その気迫は>>剣聖<<に恥じない凄まじい気迫だった、だがリュウはその気迫を真正面から受けそれをいなしていた

「……女王を殺すメリットは無い、不快に感じたのなら謝罪する」

リュウは机に手をつき深ぶかと頭をさげた、そしてカシウスの気迫が元に戻った

「なに、それでも私は人を見る目があると自負しているからね」

カシウスの表情が笑顔にもどっていた

「数日後には王都に戻るからその時に一緒に連れていこう、だから今日はもう休みなさい」

「では先に休ましてまらいます」

リュウはカシウスとレナに一礼してから部屋に戻った

「まさか異世界なんて……予想外だったわ」

「それは私もだよまさか23歳の青年が子供に戻るなんて」

2人は酒を飲みながら話し合いをしていた

「……でも彼にはおまえやエステルを救って貰った恩がある。それに……」

「それに？」

「彼の眼は恐ろしい程真つ直ぐ見つめているあの話ならどんなに辛かったのか想像すらできない、でも彼はその困難に打ち勝つ強い心をもっている。．．．女神が彼を選んだ理由がわかる気がするよ」

そして無言のまま酒を静かに飲み

「レナ、私は彼を王都に連れて行きその後軍人を辞めて遊撃士になろうと思う」

「あなた？」

「今回のことだと思いしらされたよ軍人じゃ身近の人を守ることができない、だから遊撃士になろうと思う」

カシウスがそう語っているとレナはカシウスの手に手を添えた

「私は貴方の妻です。ですから貴方をずっと支えていきますと」

レナはそう微笑んだ

「ありがとう、レナ」

そうして長い一夜が過ぎていった。そして数日後

「じゃあ準備はいいかなリュウ君？」

「問題ありません」

リュウはカシウスから妻娘を救った礼と金を貰い必要なものを買
今日、王都グランセルに行く予定だ……だが

「リュウ兄……いっちゃだ！」

エステルがリュウの袖を掴み離そうとしなかった、リュウはエス
テルの頭を撫でた

「用事が終われば戻ってくる」

リュウはエステルの目を見ながら言った、するとエステルの顔が笑
顔になった

「約束だからね！後お父さんお土産よろしく」

「愛しいパパにはそれだけか？」

カシウスが落胆してると

「あなた、お土産よろしくね」

妻にも同じことを言われ余計に落胆した

「行きますよ」

そうしてカシウスとリュウは王都グランセルにむかった

mission2 体が・・・（後書き）

ふう〜

リュウの喋り方はこれでいいのか正直疑問で・・・可笑しければ報告おねがいします

次回はアリシア女王との交渉ですが・・・交渉と戦闘かくの苦手です

m i s s i o n 3 姫の搜索（前書き）

ここのサイトの空の軌跡クロスを書いてる人達は小説を書くのが上手で羨ましい・・・orz

mission 3 姫の搜索

リュウとカシウスはロレントから定期飛行船に乗り王都グランセルを目指していた。リュウは飛行船の甲板で空を見ていた、なにせリュウのいた世界じゃありえないからだへりでもドアを開けるが限界で同じ高度を飛ぶ飛行でも外にでたら凍え死ぬほどだ。だがこの飛行船は何故か太陽の温かみ感じる事が出来るのだから驚かないほうが可笑しいのだ

「どうかな？初めて乗る飛行船は」

リュウが振り向くとボロボロだった軍服が新品同様に綺麗になっていた・・・主婦の力は未知のものだとリュウは心でそう思っていた

「自分の世界ではありえないことが起きているから驚かされたよ」

「ん？あれほどの精密な機械があるのに空を飛ぶ物はなかったのか？」

「いや、コレよりももっと高速で飛べる物やこの惑星から飛び立てる物もあるがこの高度で甲板に出れる乗り物はない」

それを聞くとカシウスは妙に納得した顔をしていた

「確か君の世界には導力器オーブメントが無いんだったな。これはオーブメントで船に力場を発生させ風を防いでるのさ」

「・・・ますますココが異世界だと実感するな」

何せこの軍用の飛行艇は戦闘機には及ばないものかなりの速さで飛びさらに垂直離着陸が出来ると聞いたときは凄い技術力だと思い知らされた

カシウスとリュウが喋っていると船のアナウンスが流れたどうやらもう少して着くようだ

「そろそろだな、席にもどるか」

リュウは無言で頷きカシウスと席に戻った

飛行船がグランセルに着きリュウとカシウスが飛行船を降りるとそこには黒い軍服をきた男女がいた

「お帰りなさいませ大佐、奥様が無事と報告をうけています。無事でなりようです」

「おおリシャールがお勤めごころうさん、まったくだもしレナに何かあったら俺は自殺するよ」

カシウスが笑いながら言うとしシャールと女性は苦笑いしていた、だがリュウはあさつての方の見ているのにカシウスは気づいた

「ん？どうしたリュウ君」

「……この街全体が城壁に囲まれているのを見ると元々ここは遺跡か何かなのか？」

この質問にリシャールは驚愕した、まだ日曜学校に行っているよう

な少年がまさか街全体の城壁に気づきそれが遺跡であるという答えにたどり着く慧眼さと頭脳にリシャールは恐怖した

「おお！よくわかったな。この街は《アーネンベルク》と呼ばれる古代の城壁に囲まれているんだ、だからこの王都の守りは帝国軍ですら破ることができなかったのさ」

カシウスがリュウに説明してるそばでリシャールの顔が鋭くなった

「失礼ですが大佐、この少年は？」

「そのことは後で教える、まあ言うならば家族を救ってくれた恩人だな」

その言葉のはリシャールも一緒にいた女性も口をあんぐりさせていた。そしてリシャール達が落ち着くとリシャールはリュウに手を伸ばした

「始めまして、私はアラン・リシャールだ。階級は中佐だ」

リュウはその手を見て一応礼儀のため握った

「……リュウ・ハヤブサです」

リュウはまだリシャールの目付きが鋭いの気づいており隙を見せないようにしていた。そして後ろにいた女性も手を伸ばした

「始めまして、カノーネ・アマルティアよ。階級は大尉よ」

リュウはリシャール同様礼儀のため握った

「さて挨拶がすんだみたいだから、そろそろ行くか」

そうしてカシウスは王城に向かった

そしてカシウス一行は王城にたどり着いた。リュウは城を見上げ関心していた、目の前には強固の門に回りには水で覆われており攻めにくく守りやすい模範的な城だからだ

「どうかねこの国が誇るグランセル城は？」

リシャルが訊ねると

「……確かにこの城は攻めにくく守りやすいいい城ですね」

リュウの返答にリシャルは苦笑いをした。とても少年が言うような内容ではないからだ

「じゃあ行くか」

カシウスが城に向おうとしたが

「お待ちください大佐」

リシャルが引き止めた

「まだ戦争が終ったばかりで城は厳戒態勢ですのでいくら少年でも城に入れることはできません」

「ああそのことか、それなら女王陛下に許可をとっている」

リシャルルの顔が驚きに変わった

「へ、陛下にですか？」

「そうだ、実際陛下に用事があるのは俺じゃなくてその子だ」

この返答にはリシャルルも反論した

「な！？大佐！分っているのですか！！まだ帝国軍の脅威が過ぎたわけではありません！」

「分っている、さっきも言っただろ陛下の許可は取ってあるし俺も同席する」

リシャルルは少し考えた後

「なら私も同席させてください」

真剣な顔でカシウスに言うと

「元々そのつもりだ、後將軍とシードにも同席させる」

その言葉にはリシャルル他カノーネも驚愕していた。王国軍の中心人物であるモルガン將軍に今回の戦争で優秀な指揮をとったことで昇進したシード少佐が同席するのだからよほど重要なことなのだろう

リシャルルはリュウを見た、一体この少年は何者かと

「じゃあ行くか」

そうしてカシウス一行は城の中にはいった

城に入りリュウは素早く周りを見渡した、万が一戦闘が起きた場合により優位に立つために頭の中でシュミレートしていた。そして謁見の間に着くとカシウスがリュウの方を向いた

「いいか、今から会う人物はこの国のトップだけれぐれも粗相のないようにな」

リュウが無言で頷いき頭の頭巾を取りカシウスにつづき謁見の間に入った

謁見の間に入ると目の前の大きな椅子に座っている女性にその下にいる威厳がある男とどこか心労が溜まってそうな男がいた。リュウはその2人はかなり強いと理解した

「陛下、リュウ・ハヤブサを連れてまいりました」

カシウスは踵を揃え背筋を伸ばし敬礼した

「ありがとうございます大佐」

その声は女性らしい包容力がある声だった。カシウスとリシャールは立っている男達と反対側に立った

「まずは謁見して頂いたことに感謝します」

リュウは頭をさげた

「いえ、大佐かの手紙である程度の内容は理解しております。その前に、大佐の御家族をお救い頂感謝いたします」

「自分は人として当然のことをしたまでです」

リュウの返答に女王は微笑んだ

「では本題に入ります。まず自分はこの世界の人間ではありません」

この言葉に女王は驚き厳つい老兵は顔をしかめた

「貴様何を言っている！」

老兵が声を荒げ追求するがリュウはそれを流した

「・・・まだ名乗っていませんでしたね」

リュウは目を閉じそう答え目を開けるとそこには鋭い目付きをした
>>漢おとこくくがいた

「龍の末裔、隼一族頭領ジョウ・ハヤブサが一子・・・超忍リュウ・ハヤブサ」

その名乗りにカシウスを除く全員が息を呑んだ、何故ならその気迫がとても少年が発するような気迫ではなく歴戦の戦士が纏う気迫そのものだからだ。しかし目の前の人物は揺らがなかった

「・・・私はリベル王国第26代女王。アリシア・フォン・アウスレーゼです」

アリシア女王が発する気迫にリュウは流石に一国を背負う人物だと思った

そしてリュウは数日前に語った同じ内容を話すと皆が数日前のカシウスと同じ顔をしていた

「陛下、コレを」

皆が驚いていた中カシウスはアリシア女王に近づきメダルを渡した

「これは七曜協会の・・・しかしこんな精密な物は初めてです。これは何処で？」

カシウスが答えようとしたが先にリュウが口を開いた

「それは私がエイドスと名乗る女神が渡してきた物です」

流石にこの言葉にはアリシア女王も絶句した、なんせ自分達の信仰する神である>>空の女神<<であるエイドスにあったと言っからだ

「貴様！戯言も大概にしろ！！」

さっきの老兵がまた声を荒げた

「陛下！こやつめを今直ぐ牢に入れるべきです！そして教会に異端者として引き渡すべきです！」

この老兵が言うことはこの国を守る者としてもつともである。子供とはいえ余りにも唐突の話であり極めつけには自分は女神と会った

と言つほどであるから不審者としは見えないのだ……だが

「將軍、私は彼の言葉は信用できると思います」

リシャルがそう言った

「彼の立ち振る舞いにあの気迫それにあのメダル、あれほどの精密度はこの国でも難しい物のはずです」

「むう……」

そうこの老兵もあれほどの気迫に国の最重要人物の前でもあれほど立ち振る舞いは納得しかねるモノがあつた

「將軍、私は彼の言うことは本当だと思います」

アリシア女王もそう言うが

「しかし陛下」

「私はこのメダルや立ち振る舞いで信じた訳ではありません」

その顔は正しく王の顔であつた

「私は彼の目を見て信じました。彼の目はまるで黒曜石のように透き通っており力強いものです、そんな人物が嘘を言うとは思えられません」

そうして老兵は考え込みそしてリュウを睨んだ、その目はまさに射殺さんばかりに

「おい小僧！ワシは貴様の言うことは信用ならん！しかし陛下が信用すると言っておる！それを裏切らん覚悟はあるか！！」

その言葉は並の兵士なら気絶するくらいの気迫があった、しかしリユウは真正面から睨み返し背中から龍剣をとりだした

「この刀は龍の牙から造りし我が一族の宝刀・龍剣！これに誓って」

その言葉にその目付きに老兵は納得したのか鼻で笑い顔を背けた

「それで貴方は私に何のようで？」

「この国での独自行動をお許し願いたい」

「……なぜかしら」

「確かに自分は女神の力でこの世界に送られましたが情報が足りません、ですのでまずこの国で情報を集めようと思います。その代わりそちらからの依頼があるときは最優先で引き受けます」

そうしてアリシア女王は少し考えた後

「……条件があります、今行方不明になっている私の孫であるクローディア・フォン・アウスレーゼの搜索です。実はこの前の戦災を逃れていたのですが行方不明になり今搜索隊を出していますが・」

リユウは少し考えた後

「詳しい情報を聞かせください」

リュウは謁見の間から出て息をつき情報を整理していたすると

「おい！小僧！」

リュウが振り向くとそこにはさっきの老兵がいた

「もしクローディア殿下に何かあれば許さんぞ」

その問いにリュウは力強く頷いた

「・・・ワシはモルガンだ！覚えておけ！」

そついいモルガン將軍はさつて行った

「すまないね、モルガン將軍だが君に期待しているんだ」

もう1人声をかけた人物は先ほどの心労が溜まっていそうな男性だ

「私はマクシミリアン・シード、階級は少佐だ」

シードが手を伸ばすとリュウもを伸ばした

「あんな物言いだが愛国心が人一倍強い人なんだだから許してくれないか？」

「・・・あれほどの人物は十分信用にたる人物です」

そういとシードは安心したような顔をした

「どうかクローディア殿下を頼む」

リュウは頷き海港都市ルーアンに向った

定期船に乗りついた街は潮の香りがする綺麗な街ルーアン。そのホテルの最上階のスイートルームに陣取る集団がいた。それは王室親衛隊である、彼等がこころルーアンで行方不明になったクローディア殿下の捜索をしておりその指揮をしているのが女中隊長と呼ばれる女性ユリア・シュバルツ中尉である

「中尉」

1人の親衛隊員がユリアを呼んだ

「どうした？」

「いえ、実は少年がユリア中尉に会いたいと」

そのことにユリアは疑問に思ったが

「今はそんな暇など無い帰ってもらえ」

そう言い職務に戻ろうとしたが

「それが軍部の方から連絡が来ていないかと言いまして」

「なに」

その言葉には反応する要素があつた、いくら少年とはいえ軍の情報
が漏れてると思つた

「分つたその少年に・・・」

そしてユリアは思い出した先ほどの導力無線での連絡に、そして

「・・・君が協力者か？」

「・・・ああ」

流石にユリアは混乱していた無線で話を聞いていたが本当に少年とは

「では顔は見せたぞ」

そついいリュウは踵^{きびす}を返し去ろうとするのをユリアは止めた

「待て！何処にいく！！」

「・・・独自行動を許可されている、文句があるならカシウスにで
も言つてくれ」

その人物の名のは親衛隊全員が驚いたまさか王国軍の英雄の名が出
されると思つていなかったからだ、そしてリュウは去ろうとしたが

「・・・聞きたい事がある」

リュウの言葉にユリアは我にかえた

「あ、ああ何だ？」

「この前の戦争で魔物も食料不足で凶暴化した報告は？」

「確か何件かきている」

そのことをリュウはメモしていた

「街道沿いに何か建物はあるか？」

「マノリア村と孤児院がある」

「もう調べたか？」

「既に調査済みだ、どちらにも殿下はいなかった」

リュウはメモ帳に書き込む

「最後だが殿下の写真かなにかなにか？」

ユリアはポケットから一枚の写真を取り出した、そこには紫色の長い髪をした可憐な少女が写っていた

「これが殿下の写真だ」

「……借りてもいいか？」

「いいが無くすなよ」

リュウは頷きその写真を借りホテルを出て街道に出た。街道を歩いていると何度か魔獣に襲われたが何事も無かったように斬り伏せていった、そして一通り歩いてると微かに子供の悲鳴と大量の魔獣の気配がその方向を向くとそれは孤児院のある方向であった。そしてリュウは森の中を突っ切り孤児院に着くと大量の魔獣に囲まれる人達がいた、そして1匹が男性に襲おうとしていた

まさか此処にまで魔獣が襲ってくるなんて何としてでもこの子達だでも守らなければ！そう思っていると一体の魔獣が僕目掛けて襲いかかってきた、僕は死を覚悟した。だが魔獣は飛び掛る途中で何かが刺さる音と共に落ちたその体には刃のついた円盤が刺さっていた、そして目の前の魔獣達がバラバラになり僕の目の前に黒い服で統一した少年がいた

奥の子供の中に先ほどの写真の少女がいたのには驚いたが忍術で魔獣をある程度殲滅し男性の前に立った少年はリュウ・ハヤブサであるリュウは魔獣を鋭いまるで刀の刃みたいに鋭く睨みつけると魔獣は本能で感じたのか警戒心を高めたそしてリュウの手足に忍者由来の手甲鉤である武装「硬殻猛禽爪^{こつかくもつきんそう}」を装備した

先に手を出したのはリュウだった。飛燕で魔獣を浮かし投げ技であ

る飯網落しの連携技「飛燕飯網」で宙に浮いた魔獣を

「はあああつ！」

地面に叩き付けた。近くにいた魔獣もまきこまれ一緒に潰れ飛び掛つてきた魔獣を裏風で避け風駆で素早く近づき魔獣を他の魔獣に投げつけ怯んでるうちに腰溜めをすると体の周りが青く輝きそして赤く輝き魔獣に突っ込んだ、そこからはもはや一方的な蹂躪だった

魔獣を殲滅し硬殻猛禽爪についた血糊を払う（魔獣の死骸が消えたのには驚いていた）そして男性の方に近づくと子供は怯えていたが1人の少女がリュウに近づいた

「私はクローディア・フォン・アウスレーゼです。あなたは？」

「……リュウ・ハヤブサ」

これがクローゼと凄腕の護衛との初対面だった

mission3 姫の搜索（後書き）

読んでいただき感謝です

技名が分らない人はニコニコやyoutubeにプレイ動画があるのでそれを見てくださいそれかPS3やXbox360をもってる人は是非プレイしてみてください面白いですよ

mission 4 樂園

私が目覚めた場所は知らない天井でした。私は戦災から逃れるためルーアン地方に行くはずでしたが知らない間に護衛の兵士とはぐれその後の記憶は思い出せませんでした。この家であつた女の人と男の人、女の人はテレサさん男の人はジョセフさん2人は孤児院を経営してるらしくこの部屋は余っていた部屋の1つみたいです。

そしてここでの生活は前の生活よりも不便でした……。しかし何処か暖かくとても幸せでした、そして私はジョセフ先生とテレサ先生とお話することになりました……。その話の内容はおそらく私自身についてでしょう、この家に来た初日に私はベッドの上で私は何者かを聞かれましたが答える事ができませんでした、ですがこの数日でこの人達を本当のお父様やお母様のように慕うことができ信用し私は自分が何者なのかそして此処に来るまでの出来事を。するとテレサ先生は

「そう……。でももう大丈夫よ貴女は1人ではないわ」

そう言い私を抱きしめてくれたそしてその晩私は泣いてしまいました心に滞るものが溶け出すかのように、泣き止んだ私はテレサ先生とジョセフ先生と相談して明後日にルーアンに向うことにした明日はこの皆といれる最後の日、だからいっぱい楽しむことにしました……。でもその平和は壊されました

まるでこの時を狙っていたといわなければかり出てきた沢山の魔獣達、ジョセフ先生は私達を守るかのように前に立ちテレサ先生は抱きしめたそして一体の魔獣がジョセフ先生めがけて飛び掛った、その時私の脳裏にお婆様とお父様とお母様が死んだと言われた時の絶望し

た記憶がよぎり悲鳴を上げそうになった

でも魔獣はジョセフ先生を襲う前に地面へと落ち私は目を見開いたそこには黒い服で統一し凶悪な金色の刃の防具をつけた男の子がいました、私は男の子に目が離せませんでした何故かわかりませんがその姿に惹かれる何かがありました

魔獣へと男の子は凄い速さで走って行き魔獣を宙に上げると魔獣と一緒に回転しながら落ち魔獣を地面に叩きつけ他の魔獣が男の子に襲おうとしましたがそれを避けその魔獣を他の魔獣の方へ投げました、男の子が何かのポーズをとると体の周りが青く光だしそして赤くなりその姿はまるで幻想的に感じました。そして男の子は魔獣達に突っ込みまるで嵐のように舞い魔獣達が全部いなくなり何時の間にか刃がついた防具はきえてました

私はその男の子に興味をもちもつと男の子ことが知りたいと思い男の子の方へ走りました。途中テレサ先生が止めようとしてましたが私は無視し男の子の目の前まで行き

「私はクローディア・フォン・アウスレーゼです。あなたは？」

「………リュウ・ハヤブサ」

男の子の名前と声を聞き私はとても胸が温くなりました

リュウは報告で孤児院には目標は^{ターゲット}いないと聞いていたが探す手間が省けたと思っていたすると先ほどの男性が近づいてきた

「ありがとう、おかげで助かったよ僕はジョセフ。ここの孤児院の院長をしてる君は？」

リュウは鋭い目付きで見ていたがジョセフは表情を崩さずニコニコしており重度のお人好しと思っただ

「リュウ・ハヤブサ」

「よろしくリュウ君。お礼にお茶でもどうかな？」

その提案にリュウは首を横に振り

「アリシア女王の依頼でクローディア・フォン・アウスレーゼの捜索をしていた」

リュウは懐から一枚の写真を取り出し見せた

「今からルーアンまで護衛する」

するとクローディアの顔が暗くなった

「悪いけど今日だけ許してくれないか？あの子がそう望んでいるんだ」

ジョセフは困ったように笑いリュウに頼んだ。リュウは数秒ジョセフの目を睨み踵を返し去ろうとした

「あっ！」

だがクローディアは去ろうとしていたリュウの手を握り止めた。その行動にリュウは驚き振り向いたすると自分が何をしたのか理解したクローディアは勢いよく手を離しリュウに背を向けた、だがリュウの手を握っていた方の手をもう片方の手で包みその顔は真っ赤になっていた

それを見たジヨセフはリュウに

「まだ助けて貰ったお礼をしていなかったね、今日はもう遅いし泊まっていきなさい」

リュウは断ろうとしたが何時もの服装の上に着ていた外装が引つ張られその方を見ると怖がつていた子供達がおり目の前の男性の性格を考え本能的に帰れないと理解しリュウは頭巾を取った。風になびく栗色の髪、鋭い目付きに翡翠を思わせる緑の目、10人中10人が美少年と言うほど整った顔をしておりそれを見たクローディアは頭から煙が上がるのかと思うほど真っ赤になった

（な、何ですか！あの顔は反則ですよ！それに性格も・・・ブツブツ）

クローディアが頬に手をあてブツブツ言ってるのをスルーしリュウは女性の方に向かい

「・・・今晚世話になります」

「よろしくねリュウ君。私はテレサよ」

その晩リュウは夕食を作っているテレサの手伝いを的確にこなしくローディアはこんな感じ orzになっていた、そして孤児院の子

供達に振り回されていたがリュウの心はどこか安堵していた

子供達が寝静まり与えられた部屋に戻ろうとしたが後ろに気配を感じ振り向くとクローディアがリュウの方に向ってきてた

「どうした？」

「え、えっと・・・その・・・あの」

クローディアは顔を赤くモジモジし最後のほうの声は聞こえなかったがリュウは何が言いたいのか理解した

「おやすみ」

リュウがそう言うときクローディアは顔は更に赤くなりながらも微笑み

「はい、おやすみなさいリュウさん」

リュウは部屋に戻った、しかしリュウが予想したことより更に斜め上の考えをしていた

（やはり添い寝はだめでしたか・・・て何を考えてるんですか
私は！女性が殿方の部屋に行くなんて・・・）

この予想はいくら超忍といえど出来なかっただろう

次の日の朝、リュウとクローディアは孤児院の玄関の前にいた

「いままでお世話になりました」

クローディアの顔は初めて孤児院に来た時より変わり明るい年相応の顔ぬいになっていた。リュウは無言で頭を下げそれをジョセフとテレサは我が子の旅立ちを見守るような顔をしていた

「また辛くなったら何時でもきなさい」

「ここはあなたの家であり私達はもう家族よ、もちろんリュウ君も」

その言葉にクローディアの目尻に涙が溜まっていたがそれを流さんと気丈に振舞おうとした。それに気づいたリュウは

「・・・世話になった、では」

別れの挨拶を言い孤児院に背を向けたその後をクローディアがつづいた。孤児院から出て街道を少しいった所でリュウは歩むのを止めそれをクローディアは不思議に思った

「ここなら人もいない」

そう言いながらリュウは振り向いた

「今の内に泣いておけ」

その言葉にクローディアは驚き顔を真っ赤になった

「え、えええええ！な、何でしっているんですか！」

「目尻に溜めているのが見えたからな」

クローディアは手で頬を覆い頭から煙が出るくらい顔を赤くしていた

「……大丈夫か」

リュウは顔を真っ赤にしたクローディアを心配そうに声をかけると

「だ、大丈夫です！行きましょう！」

そっぴいズカズカと道を歩いていて、すると荷物を持っていた方の腕が軽くなり不思議に思いそちらを向くとリュウが荷物を持っておりクローディアの1歩前を歩いていた

リュウの不器用な優しさに触れたクローディアは先程の恥ずかしさより嬉しさが増りリュウの隣に行き手を握った

「どうした？」

リュウは突然の行動を不思議そうに聞くと

「いえ……何もありますん」

頬を赤らめ嬉しそうに答えた。リュウはそのまま手を握りルーアンに向った

「隼の里」

「はっ！」

あやねは何か驚いたように顔を上げた

「どうしたの？あやね」

龍の巫女である紅葉とくノ一のあやねはリュウ・ハヤブサが龍の祠からいなくなりその搜索していた

「いえ、何かリュウ様に近づく女の気配がしたの」

その言葉に紅葉は苦笑いしていたが内心嫌な気持ちになった。紅葉もあやね同様リュウに恋心を抱いておりリュウが消えたと聞いた時は耳を疑い動揺したぐらいだ

「でも・・・その勘が本当なら」

「そうね・・・いろいろと言うこととやることがあるわねいろいろ（・・・）」と

「その時は手伝うわよ」

2人は顔をあわし

「うふふ・・・」

「ふふ・・・」

とんでもなく黒い笑みを浮かべていた

ゾクッ！！リュウは何か悪寒を感じ体が震えた

「どしました？」

クローディアが不思議そうに聞くと

「いや・・・なにやら悪寒が」

背中に冷や汗を流し嫌な気配を感じていた

ルーンに着きホテルに行くとユリアが泣きながらクローディアに近づきリュウにお礼を言いその姿にリュウは啞然としていたが写真を返し親衛隊と一緒に警備艇にのり王都グランセルに戻り城の部屋で待つように言われた。椅子に座り瞑想しているとドアがノックされ内容は謁見の間でアリシア女王陛下が待ってるらしくリュウが向うとドレスを着たクローディアとカシウス等4人がいた

「話はクローディアから聞きました、危ないところを助けていただき本当にありがとうございます。女王である前に1人の祖母としてお礼をします」

アリシア女王が嬉しそうに微笑みながら礼を言うとリュウは首を横にふり

「依頼をこなしただけです」

その言葉にアリシア女王は嬉しそうに頷いた、アリシア女王もリュ

ウの性格をしつたのかただ頷いただけだった

「それでは報酬のほうですが」

「今回はこちらから要望させていただいてよろしいですか」

リュウがそう提案すると

「ええ構いませんよ」

「ではまずこの世界での戸籍、衣食住、歴史、オーバーオール導力攻撃等の知識、この世界の最新情報の報告、そしてその援助を報酬として要求したいのですが」

この内容にはクローディアを除いた（話の内容が難しすぎ理解できなかった）全員が関心した一つ身で動くために必要な要素に国一つを背後にもつという無理難題をあっさり要求してきたからだ。その内容に悩んでいアリシア女王は

「この条件を飲んで頂けるのならいいでしょう」

「……それは」

リュウはどんな無理難題が飛んでくるか覚悟した

「貴方をクローディア専属の護衛にしたいのですが」

「……はあ？」

カシウスとリュウを除く他の人達が疑問を口にした

「何を行っておるのですか陛下！このような怪しい奴に殿下の護衛など！」

モルガン将軍が反対するが

「あら？将軍この前の話を信用したのではないのですか？」

「うぐう・・・」

前の謁見でリュウの話を信用したアリシア女王「国はリュウを信用した同意義なので将軍は反論できなかった」

「ですが！殿下は女性ですぞ、いくら護衛でも男であるのは・・・」

「私は」

将軍が話している最中にクローディアが割り込んだ

「私は・・・リュウさんが護衛でもいい・・・です」

最後のほうは声が小さかったがその場にいる全員にしっかり届きモルガン将軍はあんぐりしていた

「どうやらクローディアも納得しているようですしどうでしょうか？」

アリシア女王がリュウに尋ねると

「・・・王室親衛隊のユリアという女性は殿下をととても大切にしてい

いる節がある。さらに腕も立つし信頼できる相手である故にそちらではダメなのですか？」

「確かにユリアさんはとても有能な女性ですが王室親衛隊の中隊長になり責務が増えクロードディアの護衛にまでさせるのは余りにも酷かと思っていますので」

そしてリュウは腕を組み目を閉じ考え込み

「……………依頼ならば受けます、勿論それ相応の報酬を用意していただけるのなら」

その言葉にアリシア女王は嬉しそうに笑い

「それに関しては安心していただいて結構です。では依頼させていただいて構いませんか？」

「御意。では次に戸籍ですが」

リュウが離している最中にカシウスが割り込んだ

「その件に関しては私にいい案があります」

「ほう、それはなんですか大佐？」

カシウスは自身たっぷりに

「それは…………私の養子になることです」

その内容にアリシア女王は同意しようとしたが

「それは断る」

リユウは反対した

「隼一族であり現頭領の息子が名前を変えるわけにはいかん」

「そこら辺は安心しろ、なにも無理矢理に名前を変える必要はない
戸籍上俺の息子になれば手続きが楽だし足がみつからん」

「……………」

リユウは考え込んだ

「それに家の娘であるエステルが喜ぶからな」

その言葉にクローディアは反応した。

*頭の中（カシウスさんの息子〓その娘の兄〓公然でイチヤイチヤ
し放題〓〓〓この内容は教育上不適切な言葉なので削除されました
〓〓）

「……………」

「どうしたのクローディア？」

アリシア女王はクローディアが何か呟いたのが聞こえ訊ねると

「ダメですそんなの！！兄妹がそんなこととしては！！」

大声でそんなこと言いその場にいた全員が啞然とした。そしてクローディアはリュウの目の前に行き

「いいですかリュウさん！兄妹と言うものは血がつながつ……でも養子だから血が……でも兄妹とは神聖な！……」

「あ……ああ……」

「聞いてますかリュウさん！！」

「聞いている」

なにやらクローディアがはるか斜め上の考えで暴走しリュウに兄妹とは何かを論じていると

「では陛下彼は私の養子と言うことで」

「はい分りました、手続きはこちらでしときます」

勝手に話が進みめでたく？リュウはカシウスの息子になった

それから4年の歳月が過ぎた七耀暦1196年とある事件が起きていた……それはカルバート方面で子供が大量に失踪する事件が起きそのれは他国をも巻き込みリベールで応援に駆けつけたのは軍の反対を押し通し凄腕遊撃士になったカシウス・ブライト、リベール王家クローディア殿下護衛でありその腕は他国にまで広がり戦闘服が黒で統一しその攻撃がまるで嵐のように見えこう呼ばれていた……>>闇の嵐<<と

そしてクロスベル某所で秘密裏に各国の高ランク遊撃士、軍、星杯騎士団、軍のが無いので代わりいきたクロスベル警察が集まっていた

その部屋に4年前よりも背が伸び何処か近寄りがたい雰囲気^{きふき}に黒い服で統一し額に金属をつけ顔全体を隠し壁にもたれている男こそリュウ・ハヤブサだった

（あれが……リベール最強と聞く>>闇の嵐<<かまだ少年ではいか）

（しかしあの雰囲気にあの鋭い目付きは……相当修羅場を潜ってますね）

（おいアリオスあいつが……）

（ああ>>闇の嵐<<だな……強い、あの歳であの技量一体どんな人生を歩んできたんだ）

（ルフィナ……奴が）

（ええ例の>>闇の嵐<<ね）

（……クククいい感じに歪んでいるなウチに誘うか）

（もうアインたら）

周りから聞こえてくる声はリュウには届いてなかった、何故なら力シウスから内容をきいた子供での人体実験これはリュウがもっとも嫌う外道に落ちた輩^{やから}だからだ。心は熱く頭は冷酷にで気を溜めしていると

「よお、あんたが>>闇の嵐<<か」

声を掛けられ目を開けその人物をみると陽気そうな男と頬に大きな傷のある男がいた

「俺はクロスベル警察・捜査一課ガイ・バニングスだ。ガイってよんでくれ」

「同じく捜査一課アリオス・マクレインだ。アリオスで構わない、あえて光栄だ」

リュウは少し睨んだあと

「リュウ・ハヤブサだ。最強と名高い2人に会えるとはな」

「なんだ俺達のこととしてるとは光栄だな、リュウ」

リュウとガイ達が話していると2人の女性が近づいてきた、その2人はリュウが持っていたメダルと同じマークが刻まれているモノを持っていた

「お会いできて光栄だ>>闇の嵐<<殿。私は星杯騎士団《守護騎士》のアイン・セルナートだ」

「初めまして、私は星杯騎士団《従騎士》のルフィナ・アルジェントです」

リュウは目を見開いて驚いた

「第一位《カーネリア紅耀石》……まさかこんな所で会えるとはな、リュウ・ハヤブサだ」

「私のこともお見通しか、どうだウチにこないか？」

「……神父はガラではないんでな」

リュウがそう言うアインは笑った

「まったくだな、どうだこれが終わった後飲みに行かないか？お前と
ならいい酒が飲めそうだ」

「お！ならいい店してますからどうですか？」

アインとガイが話して盛り上げると

「あのバカ……すまんウチのバカが」

「いえ此方こそ、いつも言い聞かせてるのですが全然聞いてくれない
くて」

苦労人どうし話し合っていた

陽気に話しているがこの一角はもはや畏怖するものがあつた。>>
最強<<と名高いクロスベル警察の2人組み、星杯騎士団《守護騎士》
にその存在にもっとも近い《従騎士》、そして弱輩の身でありながら
リベール最強といわれる少年、もはやここだけが別世界だった

「ここにいたのか探したぞ」

そこにズカズカ入り込む男性、カシウスである

「あんたがカシウスか、俺はガイ・バニングスだこっちはもうしってるだろ」

「ご無沙汰しておりますカシウスさん」

「おお！アリオスカ噂は聞いてるぞ！」

「恐縮です」

カシウスと2人組みが話していると

「初めまして>>剣聖<<殿、私は《守護騎士》のアイン・セルナートだ。これが終わったら一緒に酒でもどうだ？」

「私は《従騎士》のルフィナルジエントです。もうアインいい加減にしないで」

「いやあゝこんな美女2人と酒が飲めるなら是非・・・」

「レナさんに報告するぞ？」

カシウスにとってリュウの言葉は死亡宣告と同じだった

「い、嫌だな冗談に決まってるじゃないか、そろそろ始めるから戻るな」

そういいカシウスは逃げた

「お集まりの皆様方、今回集まってもらった理由はカルバート付近で起きている連続幼児誘拐事件についてです。この犯行は同じ犯人によるもので私達遊撃士が調べ分ったことは犯人はグループで動いており各地にある”ロツジ”といわれる拠点で活動しています。幼児達を一刻も早く救出するため少数精鋭による全ロツジ同時制圧を決行します、今から呼ばれるメンバーはロツジ制圧のグループなので聞き逃さないください。まずロツジ は・・・」

カシウスは順にメンバーの名前とロツジを言っていき

「最後に”楽園”とよばれるロツジ制圧は、アイン・セルナート、ルフィナ・アンジェルト、リュウ・ハヤブサ、そして私カシウス・ブライトです。各グループの健闘を祈ります」

「別のグループか・・・残念だったなリュウの実力が見たかったのに」

ガイが残念そうに言う

「・・・また今度だ」

リュウが短く返答し自分達のグループに向った

mission 4 楽園（後書き）

眠い

ニンジャガイドン 2をやったことが無いので紅葉の性格が可笑しいかもしれませんがどうかご了承を後声優さんがクローゼと同じだった

リュウの二つ名が厨二病過ぎる・・・だれかい案をコメでお願いします

Intermission 1 ロレントへの帰還

グランセルでの一悶着があった後カシウスはその場でアリシア女王に軍を辞めると言い辞表を取り出した

それを見たその場にいた全員が呆然とした。そして素早く我に返ったりシャルとモルガン將軍は猛反対しカシウスを説得しようとしたがカシウスは「軍では身近で守れない」と言いそれを聞いたアリシア女王は

「……いいでしょう、その代り絶対に身近な者を守りぬきなさい」

「はっ！陛下」

カシウスはアリシア女王に敬礼した

その後カシウスは軍の詰め所で身支度を整え外で待っていたリュウと合流し東地区にある大型マーケットに向った

「……いいのか？」

リュウがカシウスに話かけた

「珍しいな君から声をかけるなんて。それでなにがだ？」

「軍を辞めることだ。あれ程の功績を残した英雄が何故……いや国を守るために軍人になった者が何故？」

リュウが訊ねるとカシウスは薄く微笑み空を見上げた

「俺が軍に入っただのは家族を守るためだ、剣の修行のため師匠の所に行いき色々な達人達と渡り合い竜ともやり合い強くなった・・・・だがいくら強くても遠くにいる家族を守ることが出来なかった。君がいなかったらレナもエステルも死んでいたかも知れない、だから俺は軍を辞め身近な人を守るために遊撃士になろうと決意した」

それを聞きリュウは

「・・・・・・・・そうか」

と短く答えた。だがそれを見たカシウスは嬉しそうな顔をしていた、リュウの性格を一応理解しているからその返事が納得してくれたものと理解したからだ

「さて！エステルとレナにお土産を買いに行かんと、お前も手伝え！」

カシウスがリュウの呼び名が君からお前に変わりカシウスなりの親しみを込めていた

「・・・・・・・・ああ」

リュウも満更でまなさそうに答えマーケットに向った（後談だがカシウスがエステルの土産を選ぶ時にスニーカーや虫網に釣竿を選んでおりリュウが「そんな土産で大丈夫か？」と聞くとカシウスは「エステルは誰に似たのか男の子より活発なんだ」と悲しそうな顔して答えていたとか・・・）

そして次の日の朝リュウとカシウスが帰る準備をしていると部屋がノックされそこにいた人物はリシャルだった、まだしつこくカシウスに軍に戻ることを言いに来てリュウは話が長くなると予想し部屋の外のだ。人の気配を感じ階段を方を向くと青と白が絶妙なバランスな軍服に短いライトグリーンの髪をした女性・・・ユリア・シュバルツがいた

「ここにいましたか」

ユリアはリュウの方に近づいた

「何用だ？」

「いやなに、クローディア殿下を見つけていただいたことにまあちゃんとした礼をしていなかったからな」

リュウはルーアンでユリアから礼を嫌というほど言われたのを思い出し苦笑いした

「ルーアンで礼を受けたはずだが」

「それでもだ、殿下を怪我もなく見つけてくれたのには礼はコレでも足りないくらいだ」

それを聞きリュウは溜息をついた

「陛下から聞いたが殿下の護衛をするらしいな」

「・・・・あぁ」

ユリアは窓から空を見上げた

「殿下の護衛を受けて2年、こんな不始末を犯してしまい私は悔い陛下から獄刑を言い渡される思った、しかし捜索隊の指揮を取れと言いつかれた。その時私は陛下の広い御心に感謝し一心不乱に捜索していたがそれでも見つからず私は心の中で焦った、しかし君が着て殿下をいとも簡単に見つけてしまい私は・・・・君に嫉妬した。あんなに探し見つからない殿下を見つけ脅威を退けるその力に、私がその気持ちを理解したとき自分に嫌気がさしたそして自分では殿下を護衛をする資格が無い・・・・どうか殿下を頼む」

ユリアがリュウの方を見て頼んだ、その顔は何処か苦痛で寂しい表情だった

「・・・・お前の任務は殿下の護衛だったな」

リュウの行き成りの返答にユリアは驚いた

「あ、あぁそうだが」

「なら今もそれが任務のはずだ」

「しかし！私は・・・・陛下の期待を裏切った」

リュウは壁にもたれ腕を組み目を閉じ

「なら何故その任務をアリシア女王に辞退を言いに行かず俺の所に来た」

「それは……」

ユリアは口ごもりリュウはそれに追い討ちをかけた

「なぜならお前の心にまだ未練があるからだ、殿下の護衛は自分で十分だと思う心が」

「違う！私はそんな」

「違わんな、それなら俺の所に来ないはずだ。資格が無いと戯言をぬかすなら初めから受けるな」

リュウの言葉にユリアがキレた

「貴様になにがわかる！殿下を見失った絶望感！そしてまだこの私に期待してくれる陛下からくる重荷！いきなり大佐に連れてこられ護衛をまかされるほどの力を持つ貴様には分らんさ！」

言い切ったユリアは肩で息をしていた、リュウは黙って聞きそして目を上げ窓から空を見つめた。リュウの雰囲気が変わった事に気づいたユリアは冷静になっていった

「……俺にもあるさ、自分に力がありながら大切な者を亡くした事が」

リュウはユリアの真正面に立った、リュウの鋭い目を見たユリアは身震いし冷や汗が流れた

「里にいた幼馴染の巫女が自分の叔父に殺された絶望感、そこから

くる復讐心、そして叔父を殺した後に残るのは虚無感、反逆者を滅したと祭り上げられ里の皆から期待される重荷……これがどれほどのモノか貴様に理解できるか？」

リュウは淡々と述べたがユリアは自分がどれだけ愚かか理解するには十分だった、自分だけが悲劇の主役と思い込み新しい護衛に八つ当たりした。だがその護衛が自分よりも何倍……いや何十倍という重荷、絶望を背負っているのに前を見続ける強靱な精神力……何もかもが自分より上と理解し絶句した

「……だがお前のはまだ守る人がいる」

ユリアは顔を上げリュウを見た。鋭い目に変わりは無いがその目はどこか温かみがあった

「お前はまだ守る者がいる今回の失敗をいかし精進できる」

その言葉にユリアの顔を生氣が戻っていきその目はまるで炎のように燃えている

「俺は何時までも殿下を護衛できない、だがお前は殿下の身そして心をも護衛できる、後ろを振り返るなどとは言わんだが立ち止まるな」

その力強い言葉でユリアの顔を王室親衛隊中隊長にふさわしい凛々しい顔になっていた

「……すまない、迷惑をかけた」

リュウは首を横に振った、すると部屋からリシャルが出てきたその顔はまるで阿修羅もようだった

「はあくやつと帰ってくれたか」

部屋から出てきたカシウスは疲れた顔をしていた

「しかしお前にそんな過去があつたとはな」

ユリアは驚いていたがリュウは驚いてなかった

「……盗み聞きするならもう少し気配の消し方を勉強するべきだな、アランも」

その言葉に階段を下りかけていたリシャールが驚愕していた

「はっはっは！ やっぱりバレてたか」

カシウスは笑ってていたがリシャールはリュウの元まで行き謝罪した

「すまない、大佐に誑かされて」

「おいリシャール！ 人のせいにするな後俺はもう大佐じゃない」

それを見ていたユリアは呆気としておりその後笑った

「共に護衛することになる時は宜しく頼む」

「ああ」

リュウとユリアは握手した、その後カシウスとリュウは定期飛行船に乗りロレントに戻った

ロレントに着き町の人から声を掛けられるリュウとカシウス、リュウはエステル達を救い、買物しに何度も着ておりよく声を掛けられるようになった。そしてカシウスの家に着きリュウは頭巾を取った、この行動にリュウ自身が驚いた無意識とはいえ頭巾をとるのは礼儀がいる場合と安堵できる場所だからだ

この行動にカシウスは喜んだ、異世界に単身で来てこの先の未来必ず大きな事件に出くわし心休む場所がない彼がこの家を安堵できる場所と認めてくれたからだ

「ただいま」

カシウスとリュウが家にはいると

「おかえり〜リュウ兄!」

エステルがリュウに飛びついた

「おいおいエステル、愛しのパパには」

「あ、お父さんもお帰り」

カシウスは溜息をついた

「お帰りなさいあなた、リュウ君」

レナが笑顔で迎えてくれリュウは薄く笑いながら

「
た
だ
い
ま
」

Intermission1 ロレントへの帰還（後書き）

ふう
〜

今回は閑話としました。次は本編にいきます

mission 5 NINJA

某所、暗闇が覆うなか明かりがつく小屋がありそのことからほんの微かにだが子供の悲鳴が聞こえてくる

（30分前）

「まさに豪華メンバーとはこのことだな」

大胆不敵に笑う女性、アイン・セルナート

「確かに、このメンバーなら今回の作戦は上手くいくますわね」

女性特有の包容間がある笑みをするルフィナ・アルジェント

「だが油断大敵だぞ」

それでも笑うおっさんカシウス・ブライト

「……」

無言で地図を見る少年リュウ・ハヤブサ

「さて大体の地形、建物内部の構造は頭に入れたな、まず地上に出ている小屋を警備している奴を排除してくれ」

そう今回の作戦は重要人物以外は排除……つまり”殺し”が許可されたのだ

「その後に俺とリュウが小屋に突入合図したら2人も小屋にきてくれ、その後は地下へ侵入する」

「おい>>剣聖<<」

黙って聞いていたアインが

「私と変われ」

その表情はさも楽しそうに笑っていた

「安心しろヘマなどせん」

ルフィナは止めようとせずじっとしておりカシウスと睨み合いをしてるとカシウスが溜息をついた

「・・・わかった、なら手筈どうりに頼む」

そして小屋の入り口に2人の見張りがおり、どうやら雇われた傭兵のようだ

「まったくお頭は何でこんな気色悪い奴等の仕事なんて受けたんだ・・・」

「さあな、なんだかココ最近のお頭の様子がおかしかった・・・」

2人の傭兵の後ろに音も無く忍びより音も無く首を斬りはねた、そつと死体を置くと反対側に暗闇に輝く赤い目をしたアインがいた。

リュウが扉かか突入しようとしたがアインがそれを止め自分のオーブメントと見せた、そこには既に発動完了状態でありリュウが1歩下がるとアインは扉の前に立ちおもしろい蹴り破った

小屋の中にいた他の傭兵は啞然としていた、それを見たアインは

「ボルカニツクレイブ」

笑いながら呟くと小屋ごと燃え盛り傭兵の悲鳴が響きわたる、火がある程度収まると森の中にいたカシウスとルフィナが近づいてきた

「やりすぎよアイン」

ルフィナが溜息をつきながら言うとかシウスも溜息をついていた

「これじゃ潜入どころじゃないな」

言葉どおり地下の方からドタドタと足音が聞こえておりリュウは背負っていた龍剣を抜いた

「俺が行く」

リュウは壁の方まで歩き振り返り構えたとリュウの目の前の床が開き傭兵が出てきた、しかし始めに出てきた1人の首が宙に舞うのを見た傭兵は動きを止めてしまいその隙にリュウは脳天から龍剣を突き刺しその他の傭兵達も飛燕の餌食になった。リュウが刃についた血糊を払い鞘に納めた

「なるほど確かに嵐だな」

その戦闘を見ていた笑っていた、他の2人は少年がこのような仕事をしていることにどこか後ろめいた気持ちがあった

「……いくぞ」

リュウとアインが地下に進んで行くのを見てカシウスとルフィナは急いでついて行った

森の中その様子を伺う銀髪の青年と黒髪の少年がいた

「どうするレーヴァ？先を越されたけど」

「……後についていくぞ」>>闇の嵐<<お前も俺と同じ修羅に堕ちた者か」

「いやだああああ」

「たすけてくれえええ」

地下に傭兵の悲鳴が響く狭い道を進む4人その先等を歩き自分の体の倍もある鎌を振り回すリュウ、傭兵や黒いローブを着た者達がわんさか来るがそれを素早く察知し絶技の構えを取り最大まで溜め敵を最大まで引き寄せ解き放つ。すると目の前にいた大量の敵は無残にも体がバラバラになり死体しか残らない……。まさにその姿は>>死神<<だった

「素晴らしいな>>闇の嵐<<……いや>>死神<<のほが正しいか」

リュウの圧倒的な力にアインは歓喜していた、だが残りの2人の顔は顰^{しか}めていた。その無慈悲までの残虐は歴戦の勇士でも顔を青くするほどだからだ

「……すさまじいね」

「……ああ」

黒髪の少年とレーヴァは驚いていたココまで無残な姿に変わっている人だったモノ、その光景に黒髪の少年は息を呑んだ

「……恐いか」

「……流石にね、これほどの相手とは正直戦いたくない」

「……俺もだ」

レーヴェの背中にも冷や汗が流れていた、しかしそれ以上にその相手に興味があつた、これをしたのは恐らく>>闇の嵐<<であり自分と同じく修羅に堕ちた者だからだ

「行くぞ」

「……うん」

2人は屍の道を進んだ

リュウ達は一つの部屋に入ったそこは実験を行う場所らしく部屋の隅には大量の子供だったモノが転がっていた

「なんて奴等だ・・・」

「ああ・・・女神よ」

カシウスとルフィナは子供達の前で祈りを捧げておりアインとリュウは置いてあった資料を見ていた

その内容、この犯罪グループの名前は《D G教団》その実態は空の女神を否定し悪魔を崇拝する異教徒集団でありこの”ロッジ”の内容は子供を”悪魔”への生贄や新薬の実験体などにしこの”楽園”と呼ばれる場所は各国のスポンサーへの実験体で壊れたモノを玩具として売り飛ばしたり新薬の販売などを行う資金集めとしての施設だった

この内容を見たアインは机を叩き潰した

「・・・・下種どもが」

その顔をいつもの笑みではなく本気で怒りを露にしている顔であった

「・・・・・・」

リュウは子供の死体へと近づき手を合わせ供養した、そして立ち上がったその手は血が垂れるほど握り締めその目は憎悪の炎で燃えていた

「どうした」

余り感情を表にださない2人が怒りを露にしているのに驚いた2人が声を掛けるとアインが1つの資料を渡したそれを見た2人も驚愕し怒りを露にした

「まさか各国の有力者が後ろ盾になってたとは（これでは逮捕が難しい）」

「まさか女神を批判するなんて・・・アイン」

「ああどうやら封聖省のジジイ共もコレを見たら重い腰をあげるさ」
そしてリュウ達は無事な子供がいなか調べながら進んだ・・・
怒り見落としたとも知らずに

「レーヴェここは」

「恐らく実験施設だろ」

黒髪の少年とレーヴェはその部屋を組まなく探すとある壁の色が微妙に違うのに気づきその壁を押した

施設を進むと広い場所に着き目の前に研究者風の男と屈強な傭兵が数名いた

「ふん！きたか女神なんぞに尻尾を振るう愚か共めが！」

「貴様・・・子供の命をなんだと思っている！！」

「そんな”モノ”などに構ってる暇など無いのな……そして
>>闇の嵐<<よ何故我々の理想がわからん」

その言葉に全員が驚いた

「やはり貴様達が殿下と俺を狙っていたのは」

「暗黒時代の前からある由緒正しい血縁の少女に歴戦の戦士すら勝つことが出来ぬ屈強な少年、我らが理想に近づくに最も相応しい者達だから勧誘しようとしたのだが……我らの理想の思考が高すぎて理解できぬとは嘆かわしい」

研究者風の男が額に手をあて首を横にふりまるで役者のように振舞う

「……それで殿下の暗殺か」

その言葉にカシウスはギョツ！とした

「なに体さえあれば悪魔の魂をいれ代用できるからな、それよりも興味があるのは君だからだよ」

「貴様！」

カシウスは完全にキレていた、自分の国の王女殿下が暗殺未遂にあったからのは誰もが怒る出来事だからだ

「まあ積もる話もあるがココまでだ冥土えの手向けだ面白いモノを
みせてやるっ」

研究者風の男が指を鳴らした

「ウゴオオオアアア」

「ガアアアアアア」

2人の傭兵が叫び出し皮膚が破れ異形の魔物へと変わった

「なっ！あなたは何をしたんですか！」

「何ちよつとしたサプライズさ」

男はまるで新しいオモチャを貰った子供のように笑っていた。全員が怒っていると

「・・・・テくれ」

「え？」

声が聞こえ

「・・・・コロシテくれ」

「・・・・タのム・・・・コロシテくれ」

魔物の男達が涙を流しながら喋っていた

「まだ自己があるか・・・・この薬も失敗だな」

男が残念そうした

「まあいいあの実験体以外は殺せ」

そついい男は奥の扉へと向った

リュウは無言で龍剣を抜き

「片方は片付ける、もう片方はまかせるぞ」

その提案に驚き反対するカシウス達

「こう言う相手は専門分野だ」

そう言いリュウは片方の魔物に突っ込んだ。魔物が腕を振り上げ攻撃してくるのを裏風で返し足をきりつける、が余りきいておらず腕を振り回し攻撃してくるのを紙一重でかわし同じ所を何度も斬りつけると片足がブルブル震え出し動きが鈍ってきた、すると魔物は距離を取り地面に四股を獣のように掴み体を大きく逸らした

大技が来ると予感したリュウは急いで魔物の後ろに回り込むと口から光線を吐き出し鉄の壁が溶けた。それをみたカシウス達は顔を青ざめなるべく正面に立たないように立ち振る舞った、リュウは龍剣を直し身の丈以上の棍、無想新月棍むそつしんげつこんを装備し絶技の構えをした。体の周りが青く輝きそれに気づいた魔物はリュウに突っ込んだ、だがリュウはそのまま動かず魔物が目の前まで迫り腕で叩き潰そうとする瞬間に体に周りが赤く輝き絶技が発動した

体ごと無想新月棍をグルグル回し下からすくい上げそのまま空中で高速に突き、魔物よりも高く飛び無想新月棍の先端が炎に包まれそのまま叩き付けた

叩きつけられ地面に伏せたまま怯る魔物にリュウは龍剣を装備し滅却の法を行った、カシウス達も魔物を倒したらしくリュウの方に向って歩いていった

すると魔物の姿から人の姿に変わり下半身が吹き飛び死に掛けの体だが息が残っていた

「・・・すまな・・・いな・・・め・・・いわ・・・く・・・かけ・・・た」

掠れ掠れに喋る男の近くに膝をつくりュウ

「ヒ・・・ト・・・とし・・・て・・・しね・・・た・・・こ・・・と・・・に・・・かんし・・・や・・・する」

男はリュウの手を握り締め

「たの・・・む・・・あの・・・おとこ・・・に・・・天・・・罰を・・・むす・・・こ・・・の・・・仇を！」

傭兵はリュウに懇願すると

「・・・頼まれた」

リュウは力強く頷づいた

「ア・・・り・・・が・・・と」

そのまま傭兵は安らかな顔をし息を引き取った

「後は私が」

フィオナが傭兵で手を組み

「我らが主よ。空の女神エイドスよ。今一つの魂が天の元に帰りました。その広き懷に迎え入れ、哀れなる魂に安息と救いをお与えください」

フィオナが祈りを捧げたあと振り返ったその顔を力強いモノの顔だった

「行きましょう、黒幕はもう目の前です」

リュウ達が男が行った奥の道を進んでいると歩いている男を見つけた。足音に気づき振り返る男がリュウ達の姿を目視し驚きながらも走った

だが研究者と戦闘集団の身体能力は段違いでじよじよに距離が狭まり男が角を曲がりそれを追いかけるリュウ達・・・だが角を曲がると床が無かった、前を見ると男がレバーらしきモノを下ろし笑っていた

「お前達もこれまでだ！」

そのまま男は逃走した

「くそっ！フィオナ！お前の法剣テンブルソードでなんとかできないか！」

「無理よ！レバーごと壊してしまうわ！」

万事休す、その言葉が頭の中に出た皆であつたがリュウが駆け出した

「はっ！」

皆が飛び越えるのかと思つたがその予想の斜め上の行動、それは壁走りである。リュウが壁を走り向う側にたどり着いきレバーを上げた。それを見た男は顔を青くし全速力で走り出した

そしてリュウ達が男を追いかけると広い場所に出た、目の前の祭壇に先程の男がいた

「もう終わりだ！大人しく投降しろ！」

カシウスが投降を促すが

「黙れ！忌々しい女神の僕に遊撃士風情が！」

そして男が懷から青い薬の入ったビンを取り出した

「ククク・・・これはあの出来損ないを造つた薬を改善した試薬だ」

男はその試薬の蓋を開けピンを逆さまにして口に入れた

「いかん！そんなに摂取したら」

「ぐっ・・・ぐがあ・・・グガアアアアアア」

男が胸を掴み苦しみ体の皮膚が裂け翼がはえ・・・正しく悪魔の

ような姿になった

「フハハハ・・・ナントココチヨイ」

もう声も低く響き人の面影が無かった

「モハヤワレニコワイモノナシ！・・・テハジメニキサマタチヲ
コロシシサイサマニテミヤゲヲモチカエル」

すると悪魔の体が炎に包まれた。リュウは背中の龍剣を抜き

「外道に堕ちた鬼畜が魔に取り付かれたか」

その声には恐怖お祭りもなくただ冷静だった、悪魔が手から火炎
弾を投げそれを回避するリュウ達

「ストーンインパクト！」

アインがアーツで岩の塊を落とした、すると悪魔が少しだけ怯んだ

「まだ奴は薬が体全体にまわりきっていない！畳み掛けるぞ」

カシウスがそう叫び

「はあああああああ！！！」

麒麟功を使ったカシウスは悪魔目掛けて

「くらえ！太・極・輪！！！」

カシウスが悪魔に最大の攻撃を食らわすと体がよろけ膝をついた

「ナゼダ！ナゼ！ニンゲンゴトキニカミノチカラガ！」

「それは神の力ではありません」

ルフィナが祈りを捧げていると空から戦乙女が現れ

「ヘヴンストライク！」

戦乙女による一撃は悪魔に落ちた男へは強烈は一撃だった

「グガアアアアアアア」

悪魔は叫び声を上げ手足を地面につけ怯むが

「コノニンゲンフゼイガアアアアアア」

体が炎に包まれ

「ココチイゾ！コノホノオコソワガチカラ！」

そして体が完全に炎に包まれかけたその瞬間悪魔の背後から何かが通り過ぎた、それは龍剣を構えたリュウだった

腹がパクリと開きそこから盛大に燃え出した

「アツイ！アツイ！ナゼダホノオはワレノ！」

リュウは龍剣を鞘にしまいながら

「悪鬼退散、まことの炎の浄化を受けよ」

「アツイ！アツイイイイ！」

龍剣が鞘にしまう時になる金属音と共に悪魔は爆発し跡形も無く消えた

「はあゝ勝てたか」

カシウスがその場に座り込んだ

「おや>>剣聖<<とあろう御方がこの程度でへばってどうしますか」

アインが笑いながら言う

「もう俺は歳だな、それにお前も疲労が顔にでてるぞ」

「ですね・・・正直私も疲れました」

カシウス達が喋っているさなかりュウは男がいた場所に行き一つの青いかけらを拾った・・・それは男が飲んだあの薬だった。リュウは薬を懐にしまいカシウス達と共に地上に向った

地上に出るとリュウはあさって方を向いた

「ん？どうしたリュウ？」

カシウスが疑問におもい訊ねると

「…………先に合流ポイントに向ってくれ」

そついいリュウは森の中を駆け出した

銀髪の青年……レーヴェは後ろを向いた、その腕には紫の髪をした少女を抱いて

「どうしたのレーヴェ？」

黒髪の少年……ヨシユア・アストレイはそう聞くと

「…………くる」

森をかれ出てくる人影……それはリュウ・ハヤブサだ

「貴様らか……後を着いて来ていたのは」

その言葉にレーヴェとヨシユアは顔を顰めた

「まさか気付いていたとはな」

「貴様の方には気付かんかったが、黒髪の方はまだ未熟か気配を感じた」

その言葉にヨシユアは無言で双剣を構えた……しかし

「やめろヨシユア」

レーヴェが止めた

「何でレーヴェ、あれくらい」

「お前では勝てん」

ヨシユアはレーヴェの顔を見上げたそこには1人の修羅がいた

「アイツが本気を出せばお前など瞬殺される」

レーヴェは隙を出さないようにリュウを睨んでいると

「う~~~~ん、あれ？ここは」

少女が目を覚ました

「あら、こんばんはカツコイイお兄さん。お名前は」

少女は緊張している雰囲気をぶち壊し名前を聞いていた

「……レーヴェだ」

「そっちの黒い服のお兄さんは？」

レンはレーヴェの腕から降りリュウに名前を聞いた

「……リュウ・ハヤブサ」

「始めましてましてお兄さん達、私はレンよ」

レンは笑いながらぬいぐるみを抱きしめ挨拶した。月光に照らされるその姿はまさに幻想的だった。つきひかり

「リュウ・ハヤブサ……>>闇の嵐<<か、俺はレオンハルトだ」

その言葉にリュウは驚愕した

「>>剣帝<<レオンハルトか……結社の人間が何故」

リュウは背中 of 龍剣に手をかけ警戒すると

「結社からの命令でな”あそこ”の人間の抹殺を命令されていた」

レーヴェは腰から金色に輝く剣を抜き答えた。それを見たリュウもしろがね白金に輝く龍剣を構えた

「……………」

「……………」

睨み合いが続くなか風が吹き

「…………クシュン」

レンのくしゃみと同時に駆け出し鏢競り合いになった、鏢競り合いをしながらもリュウとレーヴェの鋭い目どうし睨み合いそのまま己の剣技で打ち合いその速度にヨシユアはついていけなかったが

「あら お兄さん達凄く強いだね」

と笑いながら言うレンがいた、そして2人が間合いを取るとレーヴェの頬とリュウの肩に一筋の傷が出来ていた

「……お前も”修羅”に堕ちたモノか」

「貴様も……だが外道には堕ちていない」

2人はフツと笑い会ったするとリュウは頭巾を取った

「今一度名乗ろう、我は隼一族超忍リュウ・ハヤブサ」

その鋭い眼光にヨシユアは息を呑んだ、しかしレーヴェは真っ向から睨み返し

「結社”ウロボロス”《執行者》No.ⅠⅠⅠ>>剣帝<<レオンハルト」

2人がまた構えようとする後ろから気配を感じた

「……どうやらココまでのようだな」

レーヴェは構えを解き剣を納めた

「……そうだな」

リュウも龍剣を鞘に納めた、レーヴェはレンに近づき抱き上げようとすると

「ちょっと待って」

レンはリュウの方に近づき

「しゃがんで」

リュウは肩膝をつきレンと同じ高さまでしゃがむとレンはリュウの頬にキスをした。その行動にリュウは啞然とした

「またねお兄さん・・・いえリュウ、また会いましょ」

レンは頬を赤らめレーヴェエの方に戻った

「それでレンを何処に連れて行ってくれるの？」

「・・・奴と共に行かないのか？」

レーヴェエはレンの行動を見てもっともな疑問を口にする

「あら、レーヴェエが私を助け出してくれたんでしょ？リュウのことは気にいったけどレーヴェエも気に入ったもの」

レンは無邪気に笑うとレーヴェエは微笑みレンを抱き上げた

「この子は連れて行くが構わんな？」

リュウは我に返りレーヴェエを見た・・・そして

「・・・貴様なら安心だろ」

リュウは立ち上がり頭巾を被り踵を返し去ろうとした

「……また会おう宿敵せんゆうよ」

「またねリュウ」

その言葉にリュウは一旦足を止め

「……またな宿敵せんゆう、レン」

そのまま森の中を進み追ってきたカシウス達と合流した

「……そして話についていけず不貞腐れたヨシ
ユアがいたとか

missions NINJA (後書き)

へふうゝ

やべゝヒロインをレンにしようとしたらリュウが犯罪者なるしクローゼもヤンデレぎみだしフィオナもヒロインにするべきか、てか生存させるかどうか疑問だし

そこら辺は読者の感想で決めたいと思うので感想宜しくお願いします

mission 6 休息

森の中で合流したリュウとカシウス達は他の仲間達との合流ポイントに向った

「よお！リュウ、無事だったか！」

合流ポイントに向っていたリュウ達は別の”ロツジ”を制圧しに行ったガイ達と合流した、そしてガイが腕に誰かを抱いていた

「その子は」

「俺達が制圧しに行った”ロツジ”の……唯一の生き残りだ」

ガイ達の顔はまるで苦虫を噛み潰したような顔をしていた

「そうか……」

リュウは少し考えたあと物入れの中から青いかけらを取り出した。それを見たカシウスメンバーは驚いた顔をしていた

「お前！それは!!」

「奴がいた場所に偶然落ちていた」

リュウが驚いているカシウスメンバーに説明していると

「それは？」

ガイ達が真剣な顔で聞いてきた

「……奴等の使っていた新薬の試薬品だ」

その言葉にガイ達も驚いた

「……何故それを俺達に見せた」

煙草を吸いながらリュウに真剣な顔で質問してくる男性

「……」

リュウはその男を警戒心を持ってみた、それに気づいた男性は

「俺はクロスベル警察捜査一課のセルゲイだ。その2人の上司だ」

セルゲイはガイとアリオスの方を指差した

「質問に答えてもらおうか」

「……この犯行グループの名前は知っているか」

「ああ、《D G 教団》だ」

リュウは頷き

「資料を見た前提ではなす。まずこの問題には各国の有力人物が深く関係がありこの作戦に参加した人物とて安全かは不明、しかしこの場にいる人物は星杯騎士団、遊撃士、クロスベル警察と外道に

堕ち人道に叛くような輩はいまい」

リュウの言葉に皆が肯定した

「……本当はこれをリゼールに持ち帰り成分の調査をするべきだが」

リュウはガイの腕の中にいる少女をみた

「……体の毒消しに必要なだろ」

リュウはその毒薬を苦無で2つに切り片方をガイに渡した

「……ありがとうリュウ、助かる」

「恩にきる」

「すまんな坊主」

警察メンバーは頭を下げた

「いや、事の本末は『D G教団』にある。くれぐれも信頼する人物にしか見せるな」

「ああ分った、気おつける」

ガイは真剣な顔をして頷いた

「おいハヤブサ」

アインがポーチからメモ用紙を取り出し何か書きそれをリュウに突きつけた

「その毒薬の成分が分ればこの場所に手紙をよこせ、なに安心しろ腐っても私達は聖職者だ外部に漏れるようなへまはしない」

リュウは頷きメモを物入れにしまった

そうしてリュウ達とガイ達は他のメンバーの合流ポイントに向った

その晩、カシスウは昨日の最終便でリベールにもどり（リュウが遊撃士教会の導力無線を借りレナにカシウスの浮気未遂を報告）ルフィンとアインは教会に行きリュウはガイに連れ去られ恋人であるセシルと言う女性の家に来ていた（アリオスは自分の子であるシズクの所に行きセルゲイはメガネをかけた女性と一緒に飲みに行った）

「さあドンドン食べてねリュウ君」

ガイがリュウのことを説明するとその家族が向いいれ晚餐を頂くことになったのだ

「でもスゲ〜なリュウ、兄貴の手伝い出来るぐらい強いんだろ」

ガイの弟であるロイド・バニングスも一緒夕食をご馳走になっていた

「そつだぞロイド！リュウの奴もかしたら俺より強えかもしれねえぜ」

ガイは酒瓶片手にリュウの肩を組んだ

「いや、それはないだろ」

年齢や体格の差でそんな訳無いと思ったロイドであった

「さあ出来ましたよ」

セシルとその母親が料理を運んできた……明らかに多すぎる量の料理を。それを見たりユウはおるかガイとロイドも顔を引きつっていた

「おい……セシルこの量はなんだ？」

ガイが恐る恐る聞くと

「あらこんなに男の人がいるからコレくらいは普通でしょ？」

ニコニコしながら答えるガイの恋人セシル嬢

「いやこれ明らかに10人前はあるだろ」

そう今このテーブルに並ぶ料理はかれこれ10人前の皿が6つありとても6人で食べる量では無いのだ、流石に啞然とするリュウにセシルの父親が肩に手を置きその目は

（諦めなさい）

その目には力強い何かを感じ頭が垂れた……任務の帰りで腹を空かしていたガイとリュウを主力とする男性陣その場は最早安楽できる場ではなく激戦が続く最前線そこは《食卓》であった

何とか完食できたが父親が既に意識をイジェクトしロイドもベイルアウト寸前でガイとリュウもボロボロだった

「じゃあデザート用意するわね」

セシルと母親はニコニコしながらキッチンに向かい持ってきたのは・
・・・美味しそうなプリンえある・・・でかくなければ、これを見たロイドは意識をイジェクティンした

「ロイド！逝くな！ロイドオオオオ！」

死人に口無し、まさしくその通りの状況だがただ1人それに手をつけた男がいた

「リュウ！」

そうリュウは無慈悲までの巨大プリンの攻略に挑んだ

「・・・・・生き残るぞ！リュウ！」

その声にリュウは頷き2人は攻略した、途中で目を覚ましたロイドはその光景に涙を流した。人の胃袋の限界を超えながらも挑み続ける2人必死にプリンの山を攻略するリュウ、片腕を負傷しながら残りの片手で食べ続けるガイ、ロイドは後にこう語る

「その場にいたのは《食卓の鬼神》と《片羽の食妖精》」

そして次の日朝早くに目を覚ましたリュウその横にはベッドで寝ているロイドと苦しそうな表情をしながら寝ているガイの姿があった、昨日の晩の戦闘から苦し紛れにガイ達の部屋に帰還した男達だった。リュウはソファアを借りて休み残り2人も床についた

「……………」

リュウは昨日の出来事を思い返していた、他のメンバーとの合流ポイントでの情報交換で皆が”ロツジ”から資料はあったが生存者の子供がガイが救出した子供だけと言う惨事に皆が苦渋を舐めたような顔をしていた、だが皆それに構っている暇がなく他の資料を見せ合った結果どうやら殆どの”ロツジ”が壊滅したがまだ残存勢力が残ってるらしくそれについても見当し朝方に終った制圧作戦の直後の話し合いは夕方まで纏れ合いまた日を改めてとなった

「う……………ん、おはようリュウ」

リュウが考えているとそれなりに時間が過ぎロイドが起きた

「おはよう、先に顔を洗ってこい酷い寝癖だ」

「お……………う」

ロイドは眠気顔のまま洗面所に向かいその間にリュウは身支度を整えた、その後リュウはロイドと共に朝食を作っていると

「あ……………おはよ」

ガイが腹をかきながら起きてきた

「はあく、兄貴だらしないぞ」

ロイドは溜息をつきながら注意するが

「そうカリカリすんな我が弟よ」

ガイは笑いながら洗面所に向った、そしてガイ達は雑談を楽しみ昼頃に差し掛かるとリュウは立ち上がった

「ん？どうした」

「そろそろこの町を見物しようとな」

「あく・・・スマンこれから昨日のお姫様の見舞いいかないと」

ガイが申し訳なさそうに言う

「構わん、元々1人で行く予定だ」

「俺もそろそろ日曜学校いかないと」

それぞれが支度し

「じゃあリュウまた夜にな」

「その時はルフィナ達も連れてくる」

「ああ！兄貴また女の人かよ！」

「また！とはなんだまたとは！」

ガイとロイドが言い争いしてるのを無視してリュウは街の見物に向った少し歩くと中央に鐘がある広場に着き裏道何か無いか探しながら歩いてると少し寂れた大きな建物、クロスベルタイムズがあつた、上に向うと大きな建物と警察署がありそれほど目ばしいモノはなく右に行くとき大きな湖が見えた灯台があり目の前の広場で子供達が遊んでいた……が

「やめてください！」

まだ舗装が終っていないのか薄暗い道で2人の少女にガラの悪い男達がからんでた

「ぶつかつといてその態度はなんだ！ああ！」

「ですからさつき謝りました」

「骨折れてんだよ！さつさと金払えや！」

どこからどう見てもアホなこと言ってる男達だがリュウはそれ以上に呆れてるのは見て見ぬフリをする人達だった、そして男達がシビレを切らせたのか1人の少女を庇うように立つてる少女を殴ろうとしていた

フランがガラの悪い人達にぶつかりちゃんと謝ったのにお金払えとかお父さんやお母さんを呼べと筋違いのこと言うからおかしいですと正直に答えたら怒鳴りちらして頭にきた私はその人達に正論言う

と殴るポーズをして私は目を瞑った……でも何もしてこないのを疑問に思いそくと目を開けると黒い服を着た男の子がいて

「……………」

その背中は凄く大きかった

「なんだこのガキ！邪魔だどっかいけ」

男達がリュウがまだ少年だと油断しておりニヤニヤしていたが

「……………」

無言で睨みつけ握っていた男の腕を握り締めた

「い、いででででで」

男は片腕でリュウの腕を外そうとしたがビクともせずそのままじょじょに捻ると男は跪いた

「このガキ！」

他の男がリュウを殴ろうとしたが素人のパンチが超忍にあたるはず無く片手で流し体制が崩れた所を足で払い踏みつけた

「ぐげっ！」

男は痛みでのたうち回っていた

「調子にのるな！」

男は腰の後ろからナイフを取り出した、少女達は短く悲鳴を上げたがリュウは腕を掴んでいた男をのたうち回る男に向けて投げた、男達がぶつかり汚い悲鳴をあげておりリュウに掴まれてた男の腕は青くなっていた

「おらああああ！」

男がリュウにナイフを向けて突撃したが

「・・・握りが甘い」

リュウは難なくナイフを叩き落とした

「へ？」

男がまぬけな声を上げると同時にリュウは膝をバネのように使い反動で男の顎を蹴り抜いた、メキメキと嫌な音が鳴ったがリュウは平然とした顔をしていた

「ひ、ひiiiiiiii」

残りの男2人は倒された男を担ぎ逃げた、まだ見捨てないだけ常識が残っていたようだ、リュウは少女達が無事か確かめると去ろうとした

「まって！」

すると1人の少女がリュウを引きとめた

「私ノエル・シーカーって言います、助けてくれてありがとうございます！」

そっついノエルは頭を下げた

「私はフラン・シーカーです、お姉ちゃんお助けしてくれてありがとうございます！」

フランも頭を下げた、だがリュウは首を横に振り

「……見て見ぬフリをする輩に嫌気がさしたただけだ」

そっついリュウは野次馬を睨むとまるでクモの子のように散らばった

「あの、あのたのお名前は？」

フランが首を傾げながら聞くと

「……リュウ・ハヤブサ」

「リュウさんは何をしてたんですか？」

フランはニコニコしながら聞いてきた

「街の見学だ」

リュウはぶっきらぼうに答えたが

「なら私達が案内しますうゝ、お姉ちゃんもそれでいいよね」

「ええ構わないわよ」

姉妹で納得していたが

「・・・そちらのも都合があるだろ」

「いえ、ただ広場に行くだけでしたから」

ノエルもニコニコしながら答えた、するとフランがリュウの手を握り

「行きましょリュウさん」

リュウは溜息をつき顔は諦めた表情をしていた

「・・・では頼む」

ノエルもリュウの手を握り

「では行きましょ」

その後はフランとノエルでクロスベルを周り夕方になるとリュウは2人を家まで届け教会に向った、教会に着くとそこには金髪のとてモ爽やかでダンディーな人がいた

「おや見ない子だね」

その男性がリュウに喋りかけてきた、リュウは無言で男性の顔をみると男性はニカツと笑い齒が光った・・・ように見えリュウは苦手なタイプと思った

「私はディーター・クロイス、このクロスベルで会社を経営している者だ」

そしてまたニカツと笑った

「・・・リュウ・ハヤブサ」

リュウは溜息をつきながら答えたが

「リュウ・ハヤブサ・・・・・・・・>>闇の嵐<<君か」

その言葉にリュウはディーターの顔を睨みつけたその鷹のように鋭い目で

「言っただろ会社を経営しているすなわち会社の社員を背負ってるからいろんな情報が必要だ・・・勿論裏の情報も」

リュウは無言でディーターを睨んでいたがそれをやめた、ディーターは内心ホットした

「信じてもらえてなりよりだ」

無言のまま教会に向おうとすると目の前からロール状のツインターの少女がこっちに向ってきてた

「お父様！またいけないことしたでしょ！」

少女はその場に着くと同時に父親に文句を言った

「ごめんなさいお父様が迷惑かけまして、私はマリアベル・クロイス といいます。あなたは？」

「・・・リュウ・ハヤブサ」

「ごめんなさいリュウ」

マリアベルは頭を下げた

「気にするな唯の世間話だ」

そっくりリュウは教会に向かおうとした

「また会いましょうリュウ」

リュウは振り返るとマリアベルは笑顔だった

「・・・またな」

リュウは教会に向った、教会でルフィナとアインに合流したリュウは指定された場所に行くと既にガイとアリオスがおりそのまま店・・・いや屋台についた

「よお親父」

「いらっしゃい、ああお前か」

その屋台はラーメンの屋台で席は丁度5つあった

「親父何時もの、お前達もそれでいいか？てかここは種類は1つしかないがな」

「当たり前だ私はこのラーメンに全てをかけている」

「ほお、なら期待させてもらおうか」

アインが大胆不敵の笑みを浮かべると

「まかしてもらおう」

店主である親父も大胆不敵に笑った、そして出来たラーメン「霸王麵」を食べると

「旨いじゃないか店主」

「ええ、本当に美味しいわ」

女性二人は大いに喜んでいた

「親父！酒あるだろ？」

「なんだ飲むのか、少し待て」

親父が屋台の下からビンに入った酒を取り出した

「これはカルバートの商人から譲って貰った1品でなとうやら米か

ら造った酒らしい」

それを聞いたリュウは驚いた、東方の国とは聞いていたがまさか日本酒と同じ製法で造った酒があるとは思ってもみなかったらしい

「親父全員分のコップ頼む」

ガイはそう頼むが

「まってリュウ君はまだ未成年よ」

ルフィナはリュウが未成年で酒はダメといったが

「大丈夫！昨日も俺と一緒に飲んだから」

「………なんですって」

男性陣はルフィナの顔に恐怖した笑顔なのに目が笑ってなくて背後に般若がいるかのように、だがリュウはそのビンの中身をコップに注ぎ飲んだ

「あっ！」

ルフィナはびっくりしていたがリュウはまるで舌で転がすように味わい

「………うまい、これはいい水といい麴カビをつかってますね」

そっついまた一口つけた

「……………なんで飲めるんですか？」

ルフィナは後ろに般若を携えたまま聞くと

「カシウスと晩酌をしている」

「何時頃から？」

「つい最近だ」

そっぴいなからリュウはガイやアリオス、アインに酌をした

「お！悪いな」

「すまん」

「気がききじゃないか」

ガイ、アリオス、アインの順でリュウに礼をいい

「……うまい」「」

口を揃えて言った、リュウはルフィナの前に置かれたコップに酒を注いだ

「……………もういいです私も飲みます！」

クロスベルでの休息の夜は楽しく過ぎていった

mission 6 休息（後書き）

いや〜大学のレポートのせいで更新遅れました

- ・ やばい・・・いろんな所でフラグ乱立しすぎた、回収できるかな・・・

mission7 闇の足音

屋台で夕食をすましアインとガイが「二次会だ！」と騒ぎ東地区の料理屋でまた騒ぎルフィナ、アリオス、リュウは頭を抱えていた

そして次の日、リュウとロイドは快調な朝を迎えていたが

「う~~~~ん・・・う~~~~ん」

ベッドの上で顰めた顔をしているガイがいた

「はぁ・・・昨日も二日酔いかよ」

ロイドは呆れながら言うところガイが頭を抱えながら起きた

「大きな声を出すなロイド、頭に響く」

「ならそんなに飲むなよ・・・リュウも飲んでたって聞いたけど平気だぞ」

ガイが頭を抱えながらリュウを見た

「いつつ・・・お前もそれなりに飲んでいたのに何で平気なんだ」

リュウは物入れから2粒ほどの黒い丸薬をガイに渡した

「二日酔いに聞く丸薬だ、コレを飲んでいた」

それを聞きガイは驚き

「何で昨日くれなかったんだよ」

丸薬を水で呑み大分楽になりリュウに訊ねると

「……………渡す前に寝たからだ」

「んでアリオス達にも？」

リュウは黙って頷き衣服の入った鞆を整理し始めた

「そい言えば今日帰るんだったな」

ガイがどこか寂しそうに言う

「そつえば今日だったね」

ロイドも寂しそうに答えた、リュウは何か思い出したような顔をして

「……………あの少女は」

ガイに尋ねると

「そつだつ！お前もあの子に会ってくれないか？あの薬のおかげで
大分よくなったんだ」

リュウは少し考えたのち、頷いた

「そつか！よかったぜ、なら昼に病院に行こう」

リュウは外装を着て昨日と同じコースを歩いてると

「あっ！リュウさ〜ん」

手を振って走ってくる赤い髪の少女、フラン・シーカーとその後ろにノエル・シーカーがいた

「おはようございますリュウさん、こんな朝からどうしました？」

リュウはいつもどおり無愛想に

「散歩だ」

だがそれをモノともしない姉妹は笑顔になりながら

「私達も散歩してたんですよ」

「よかつたら一緒に行きませんか？」

昨日の出来事を覚えているリュウは2人だけでは心配に思い頷いた

「じゃあ行きましょ」

フラン、ノエル、リュウは昨日行った道を散歩コースとして歩いていると

「リュウさんは何処に住んでるんですか？」

「リベールだ」

フランの質問を簡素に答えた

「リベールですか！私行ってみたいですう」

ニコニコしながらフランが言うつと

「でもリベールに住んでるでしたら何時帰るんですか？」

ノエルが疑問に思い聞くと

「今日だ」

「「えっ！」」

2人が声をそろえた

「寂しいですう」

フランが残念そうにいいノエルも残念そうな顔をしていた

「また・・・会えますか？」

ノエルが目頭に少し涙を溜めながら言うつと

「・・・・・・・・・・」

無言で親指の腹で涙をそつと拭いだ

「・・・・・・・・未来を信じる」

そう言いながら頭を撫でた

「あう……」

ノエルは顔が赤くなりリュウから目線を外した

「ああー！お姉ちゃんだけずるいですうー」

フランが頬を膨らませ怒るとリュウはもう片方の手でフランの頭を撫でた

「えへへ」

こちらも顔を赤らめ笑顔になった、その後リュウ達は手を（少女達に強引に）繋ぎ帰った

余談であるが少女達はかなり少年から人気があり公園でしかも《抜け駆け禁止》と言う暗黙のルールを無視し自分達の知らない少年と歩いており

「……なんだアイツは！」

「くそっ！俺のフランちゃんが」

「ノエルちゃんとイチャイチャしゃがって……」

その他大勢が怨念を送っているとリュウがフランとノエルの頭を撫で

それに2人が顔を赤らめ喜んで（風に見えて）おりその後手を繋いで歩いて去った。それを目撃した少年達は

「……チクシヨオオオオ！！」「」

と心の中で叫び現状はこんな O T L 状態だった、公園にいたオバサマ方は

「あら、いい男じゃない」

「ほんと、しかも落ち着いてるいい子ね」

「あの子ならあの2人を任せれそうね」

と笑っていたとかなんとか

2人を家に送りガイの部屋まで行くと丁度ガイが出てきて

「おーリュウいい所に帰ってきた。今から病院に行くんだが大丈夫か」

無言で首を縦に振った

「よし！なら行くか」

リュウとガイは南にある広場に着きそこにはバス停がありリュウはこの世界は文明が高いと考えているとバスが到着、それに乗り数十分後大きな病院についた

「ここがクロスベルが誇る病院《聖ウルスラ医療大学》だ」

リュウは病院を見上げた、それは自分のいた世界の大学病院と同等に広く大きい病院だと思った、ガイに着いて行き病院内に入ると清楚で落ち着く雰囲気だが薬品の匂いは余り好ましくないそう思いながら歩き3階のある部屋に到着した

「ここがあの子の部屋だ」

ドアの隣にあるネームプレートを見ると>>ティオ・プラトール<<と書いていた、ガイがドアの前に立つと自動でドアが開いた流石にこれにはリュウも驚いたまさか自動ドアまでの技術があるとはと考えていると

「よう！嬢ちゃん」

ガイが入っていくのを見てリュウも病室に入った

「あら？ガイ」

病室にはナース服を着た女性、セシルがいた

「よかったわ来てくれて」

セシルは何故かホツとした顔をした

「やっぱか・・・」

それは何故かリュウには理解できた。”あの”場所で実験体にされ

いきなり別の場所に連れてこられて警戒しない方がおかしい

「嬢ちゃん気分はどうだ？」

ガイが笑顔で話しかけるが

「・・・・・・・・・・」

何処か怯えた目付きで警戒心を緩めない

（・・・・・・・・・・やはり怯えか、しかたあるまいが）

壁にもたれていたリュウは覆面をとりティオに近づいた

「ッ！！」

ティオの体がビクッ！となり怯えた表情をしていたがリュウはそれを無視し近づいた

「お、おいリュウ」

ガイも止めようとしたがそれを避けティオのベットの直ぐ横までいき手を伸ばした

「ッ！！！！」

ティオを目を瞑り体を強張らせた、しかしリュウは優しく頭を撫でた

「え」

ティオは何をされているか分らない顔をしていた

「・・・・・・・・按ずるな、ココにお前の敵はいない」

リュウの顔を珍しく薄くだが微笑んでいた

「そつだぞ！ココにいる人達はてきじゃないぞ」

ガイも笑いながらい

「そつよティオちゃん、私達はあなたと友達になりたいの」

セシルも笑顔で言う

「・・・・・・・・本・・・・・・・・当」

僅かだが名前以外で初めてティオが喋った、リュウは元の場所に戻り壁にもたれガイがティオの頭を撫でた

「ああ！本当さ！もし悪い奴がきたら俺がやつつけてやる！」

するとティオは大声を出してガイにしがみつき泣いた、ガイはゆっくり頭を撫でて落ち着かせた。数分後泣き止んだティオはチラチラとリュウの方を見ていた

「ん？ああアイツはリュウって言うんだ、おいリュウお前も挨拶しろよ」

リュウは顔だけティオにむけ

「…………リユウ・ハヤブサ」

そついいまた目を閉じ顔をふせた

「ゴメンなアイツ無愛想だから」

だがティオを首を横に振り

「いいえ、大丈夫です」

こちらも喋るようになったがポーカーフェイスなので気にしなかった

「だがアイツには感謝しないとな」

ガイが困った風に笑うとティオは首をかしげた

「嬢ちゃんの体の中にある薬の副作用や毒を消す薬が出来たのはアイツのおかげなんだ」

ティオは驚いた表情をし頭を下げ

「ありがとうございますリユウさん」

リユウは首を横に振り

「……………気にするな太陽の下を歩く権利は誰にでもある」

そついいリユウは病室のドアに向った

「どこいくんだ？」

「そろそろ時間だ」

ガイとセシルは少し寂しい顔しながら

「そうか・・・また来いよ」

「何時でもきてね」

リュウは頷き部屋を出ようとすると

「また・・・会えますか？」

その声にリュウは振り向いた、ティオの目は何処か怯えておりおそろく” ロッジ” の記憶を思い出したのだろう

「・・・未来を信じる」

その力強い言葉に初めてティオは笑った、そのまま病院を去りクロスベルに付き荷物を取りに行く途中にリュウは驚愕した。忘れるはずのない銀髪の青年・・・レーヴェと紫の髪をした少女・・・レンがいたからだ、レーヴェが振り向いた

「・・・貴様が」

剣に手を添えないのを見てリュウは警戒心だけ強め近づいた

「ふっ・・・安心しろ遣り合うつもりなどない」

だが警戒心をとかず近づくとレンが振り向いた

「あらあ、こんにちはリュウ」

レンは笑顔でリュウに挨拶するが当の本人は頷くだけであつたがそんなこと気にせずリュウの腕に抱きついた

「もうちゃんと返事しないとだダメよ」

「……………善処する」

リュウはそう答えるとレーヴェの方を向いた

「この街に何用だ観光ではあるまい」

「貴様には関係ない……………と言いたいが、レンの親だ」

「もうレーヴェったら偽者のパパとママなんていらぬのに」

レンがめんどくさそうに溜息をつく、それをみたリュウはどういう内容か理解した。恐らくレンは自分の生みの親に売られ見捨てられたと思っており酷く心が不安定で歪んでいる、そう思ったリュウはなるべく優しくレンの頭を撫でた

「あら？どうしたのリュウ」

リュウは黙って頭を撫でそれにレンは気持ち良さそうに目を細めた

「……………リュウ・ハヤブサ」

レーヴェの声の質で理解し顔を上げた、そこにはレンと同じく紫の

髪をした男性に赤い髪で目の色がレンと同じ女性……そしてその女性に抱かれている赤ん坊、この光景を見せてはマズイと瞬時に思いレンを見たリュウだが

「……………」

顔は笑っているものの心が不味いと直感した

「前の子はあんなことになってしまったけれど……でもよかった。女神様は私達をお見捨てにならなかったんだわ」

「おいおいその話はしない約束だろう？昔のことは忘れよう」

「ええ……哀しいけれどその方があの子のためよね……おお、よしよし

いい子でちゅね」

「あぶう、あ〜」

こちらなど関係ないと言わんばかりに平和そうな顔をしている夫妻と赤ん坊

「……………殺すか？」

レーヴェの発言にリュウは龍剣に手を伸ばした…………しかし

「いいわ…………だってあれは赤の他人じゃない。レンにもう本当のパテル＝マテル（パパママ）がいるもの」

レンは笑っていた、しかし心は泣いてると感じたリュウはレンを抱

きしめた。その行動にレンはあたふたし始めた

「えっ！どとどとうしたのリュウ！」

だが無言でリュウはレンを抱きしめた後ポーチから黒くどこか気品の感じる箱を渡した

「これは？」

「霊仙龍骨丹……絶大な回復が出来る薬だ、これからお前が歩む道は険しい道……これは自分がもう駄目だと思う時に使え」

リュウはそれを渡すと踵をかえた

「……まかせるぞ」

「……ああ」

リュウはレーヴェとすれ違う瞬間にそう言った

「リュウ」

レンが声をかけ

「また……会いましょ」

「……」

無言で頷きクロスベルを去った

それから1年後カシウスや遊撃士教会の連中から勧誘を受けるリュウはそれを断固拒否し続けある晩、リュウは仕事を1段落させカシウス邸でエステルの相手をしてると

「ただいま」

「あ！おかえりお父さん」

「お帰りなさい、あなた」

カシウスが仕事から帰ってた

「……カルバートの事件は」

「大丈夫だ火種も消してきたし首相とも話しをつけてきた」

それに納得したような顔をしたリュウ

「お土産があるぞエステル」

「ほんとー！ストレイガー社の新モデル！それとも釣竿！スタッフ
ロッド！」

目をキラキラさせて尋ねるエステルに

「はあ、どこで育て方を間違えたのか……」

カシウスは溜息をつきレナはそれを微笑ましく笑っていた

「ん？お父さんその毛布がお土産？」

「おゝそうだぞ」

カシウスは腕に抱いてる毛布を外すと・・・そこには黒髪の少年がいたそしてリュウは双眼を開いて驚きを見せていた

「なかなかイケメンな子だろ、俺にはかなわんがな」

「お父さん！何その子！隠し子！！」

その言葉にカシウスはずっこけた

「・・・何処で知ったんだそんな言葉」

「シエラ姉が教えてくれた」

カシウスは再度溜息をつき

「まったく・・・あの耳年増め」

「あなた・・・説明してくださいませね」

「ああ・・・その前にこの子を寝かせよう、レナ薬箱を頼む応急処置しかしていない」

「わかりました」

カシウスは自分の部屋のベットに黒髪の少年を連れて行きそれにづくエステル、棚から薬箱をとりだすレナ……しかし唯1人少年を睨みつける人物がいた

「で、お父さんこの子いつたいどうしたの！」

エステルがカシウスに疑いの目で見ると

「愛しのパパを信じなさい、まあこの子は……今回の仕事で預かった子だ」

「じい~~~~~」

エステルは声を出してまで疑いの目で見ておりカシウスは内心泣いていた

「すまないがレナ、この子は家で預かることにした。迷惑かけるなだがレナは首を横に振り優しく微笑み

「私は貴方の妻です、あなたがそうするのなら私はそれを支えます……ですが今回の件はじ~~~~~くりと《お話》してもらいますね」

そこには……悪魔がいた。顔は笑ってるのに背後に悪魔が見えカシウスは若干腰が引き気味で顔は冷や汗ダラダラになっており部屋にいたリュウも背中にも冷や汗を流していた

「う……ん」

「あ！お父さん目覚ましたみたい」

ベッドで横になっていた少年は目を覚ました

「ここ・・・は・・・」

「ここは俺の家だ、可愛い娘に自慢の妻それに腕のたつ護衛がいる
っていったろ」

「そういえば・・・そんな・・・て！カシウス・ブライト！あ
なたは一体なにを・・・！！」

少年が視線を感じそちらを見ると息を呑んだ、なぜならその視線の
人物があまりにも強すぎる人物だからだ

「・・・>>闇の嵐<<」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

リュウはただ無言で少年を睨みつけた、腕を組んでいたが既に両手
に手裏剣を装備し警戒心を厳としていた

「くら！」

エステルが少年にとび蹴りを食らわした

「あたっ！」

「けが人なんだから動かない！大きな声ださない！」

少年は蹴られた所を手で押さえながら

「わかった……しかし君の行動のほうか……」

「何かいった？」

「だから君の行動さ」

「な・に？」

「………何でもないです」

少年の肩に手を置かれ見上げるとリュウがおりその目は同情の目を
しておりそれを察した少年は

「………苦勞してますね」

「………いな」

ここに新たな信頼関係が結ばれたとか嘘とか

「で？あんた名前は、あたしはエステルよ！」

「………名前……」

「そう名前よ！あたしだけ言うなんて不公平よ！」

「名前が分らなければ呼ぶときに不便だしな聞かせてくれるか？」

少年は少し呆けたあと

「わかりました．．．．．僕の名前は．．．．．ヨシユアです」

そしてヨシユアの看病をエステルに任せてカシウス、レナ、リュウは居間にいた

「さてあなた、聞かせてもらいますか？」

レナが真剣な顔をして聞く

「実は．．．あの子に命を狙われた」

「な！」

「．．．．．」

レナは驚愕の表情、リュウはポーカーフェイスを崩さず

「．．．．．カルバートとの関連性は」

「無いとは言い切れんが事件を解決し変える途中に襲われた」

リュウは少し考えたのち

「．．．．．《結社》」

その単語にカシウスは反応した

「やはり知ってたか」

「執行者と戦闘になった」

それはカシウスを驚かすに十分な言葉だった

「なっ！誰とだ」

「……………《剣帝》、奴はそう呼ばれる」

カシウスは険しい顔をした

「そしてその側にあいつ…………あの童もいた」

「なんだと！いや…………しかし」

カシウスはとレナは驚いたしかしカシウスは何か考え始めた

「…………あの少年は俺の暗殺を失敗すると多分同じ組織の仲間
に殺されかけた」

「そんな…………」

レナは悲痛な顔をした、あんな子供に殺しを教えそして殺そうとしたからだ

「……………（捨てられた、いやそれなら確実に殺しにかかる何故
今を襲わない）」

そうカシウスの部屋にはエステルとその標的しかない狙うならこ
れほど条件が整った状態はない

「それでな・・・俺はあの子を息子にしようと思う」

その言葉をレナとリュウは真剣な顔をしていた

「あの子には人並みの幸せを感じて欲しい、だから」

「人は・・・」

カシウスが喋ってる最中にリュウが喋り出した

「闇に堕ち氷の心は簡単には解けぬ」

その言葉は2人の顔は険しくなつたしかし

「だが・・・日の光は闇を照らし氷を溶かす、人これを救いという」

言葉の意味を理解した2人

「エステルがあの子の救いになると」

カシウスの問いにリュウは無言で頷いた

「確かにあの子はヨシユア君を光で照らしてあげるわ」

レナの顔には先程の険しい顔ではなく温かみのある微笑みになっていた

「そうか・・・そうだな、自分の子を信じよう」

「う．．．ここ．．は」

何も無い光の空間、そこに倒れている2人

「おかしい、俺は殺されたはず．．．．」

周りを見渡すと自分の隣に見知った人物が倒れてた

「ルフィナ！何故ここに！いや、それよりも」

男がルフィナを揺すると

「う．．．ん．．ここは」

「ルフィナ！気がついたか、大丈夫か」

「あなたは．．．．ガイさん！何故ココに．．．いえこの空間は」

「さあ俺にも分る．．「それは私が説明いたします」！！」

2人は後ろを振り返ったそこには背中に翼を生やし神々しさが見える女性だった

「失礼しました、私はエイドス、。あなた方から女神と呼ばれる者です」

ルフィナはすぐさま跪き両手を組み祈りの姿をした

「私めのようなモノに御姿を現して頂いた事に感謝いたします」

「楽にしてください、本来あなた方は死ぬ筈ではありませんでした」

「え？」

「なに！？」

エイドスの言葉に2人は驚愕した

「今世界全体に悪意が広がり最早私達では対処できないようになりました」

エイドスは初めてリュウに説明したことを言うと二人の顔が青くなつた

「なら・・・私達の世界は」

「何とかならねえのか女神様！」

だがエイドスの顔はどこか安心している顔をしていた

「大丈夫です・・・彼がいます」

「彼？」

「だれだ・・・まさかリュウか？」

エイドスは頷きリュウの過去を話すと2人は啞然としていた

「彼を信じましょ、彼は英雄……いえ本当の救世主メシアですから」

そしてこの世界……ゼムリア大陸にさいが投げられ駒が揃った。
もはや歩みを止められる者は誰もいない、救いか破滅か……それを
選択できるのは唯1人、そう龍の末裔だけである

そして物語は動き出す

mission 8 齒車

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア」

リベール王都グランセル、その郊外に広がる薄暗い森の中・・・そこに黒服の男4人と小太りした成金風の服装をしたおっさんが何かから逃げるように走っていた

「くそっ！・・・狗めが！」

悪態を吐き出すかのように言いながら必死に走る集団、しかし

「ゲガッ！」

おっさんを囲んでいた黒服の男が倒れた、その後頭部には刃が付いた円盤が刺さっていた

「ヒイツ！」

おっさんが汚い悲鳴を上げ逃げようとした、しかしその逃走方向に一人の青年が立っていた。長身に体全体を黒いアーマーみたいので包み、足、腕に防具を装備し額を金属で守っている覆面をつけている男がいた

黒服達は冷や汗を流し焦りを顔に出しながら懷から銃を取り出そうとしたが

グシャ

右にいた黒服の顔があつた部分に金色の鉄塊が血糊をべったりつけ鎖に繋がれてるのを気づいた頃にはそこに何も無く目の前に黒くめの男がおり背中から抜刀された刃が黒服1人を斬った、だが黒服の1人は何処にも異常を感じず相手がミスッたと思い銃を取り出すとすると体が斜めにズレた

「へ？」

黒服は間抜けな声を出したがそのまま重力に逆らわず地面に落ち斬れた残りの断面から噴水のように血が飛び出した

「ひいいいっ！」

最後の1人になった黒服が銃を乱射するが青年には掠りもしない、もともと拳銃は扱いが難しく至近距離でなければ熟練者でも正確に当てるのは難しい。それが冷静さを失った人物が当てれるはずも無く簡単に距離を詰められ斬り捨てられた

「た、頼む！殺さないでくれ！金ならいくらでもやる！」

おっさんは腰を抜かし必死に命乞いする・・・だが

「・・・・・・・・」

青年は無言でおっさんに近づき手に握られてる刀は血糊が付着しながらも白金の美しさがあつたその目はまるで獲物を狙う隼のように鋭かった

「くそっ！くそっ！くそっ！！あんな小娘などの狗に私がああああ
あ」

「・・・・・・・・滅」

青年は刀を横一文字に払った、するとおっさんの首がズレ地面に転がった。その表情は見るにも無残な醜い顔だった、青年は刀に付着した血糊を振り払い鞘に納め来た道を戻った

その青年こそ神に選択肢を委ねられた人物、龍の末裔であり隼一族超忍リュウ・ハヤブサだ

グランセル城

「ご苦労様です」

グランセル城の広場の一角にテーブルに菓子と紅茶が置かれドレスを着ている女性はその場にぴったりだが黒服で統一されてるリュウには場違いな姿だ

「では報酬です」

その女性、リベール王国女王アリシア・フォン・アウスレーゼだった。アリシア女王は側にいた護衛に命令しリュウに報酬の入った袋を渡した。リュウはその袋を受け取り中身を確認をする

「・・・・・・・・ごめんなさい、本当はこのようなことは貴方に頼むことでは無いことなのに」

リベールでの不正な商法、脱税、薬などは本来軍で対処し、裏の深い部分にも秘密裏部隊で当たるのだが現在軍に不審な動きアリと報告があり女王陛下個人で信頼できる人物であるリュウに依頼が回ってきたのだ

「……かまわん依頼をこなしたただけだ」

中身を確認し終えたリュウは席を立った

「あら？もう行くの？」

「……」

返事を返さず去っていった

「……はあ」

アリシアは溜息をついた。何故ならリュウが休んでいる所を聞いた事が無いからだ、ジェニス王立学園に通うクロードアの護衛に今回の依頼、さらに《D G 教団》事件で見た圧倒的までの力に星杯騎士団からの依頼……もといヘッドハンティングに世界各国からの依頼、これは断っているがつねに世界中を巡って情報収集をしているリュウにアリシア女王は心配していた

「……何とかして休暇をおしつけないと」

「やあああつ!!」

栗色の髪をツインテールで纏め赤いスカートとスパッツから見せる健康的な足に赤い服そして赤い棒を振り回す少女、エステルと

「はあつ!!」

漆黒の髪と琥珀色の瞳を持つ涼しげな容貌の持ち主、ヨシユアは地下水路で準遊撃士試験の実技試験をしていた

「もお!しつこい!!」

水路の奥にある目標の前に魔獣が多数おり最後の1匹が硬くなかなか倒せなかった

「エステル!僕がいく!」

ヨシユアは自分の獲物、双剣を構え物凄い速さで魔獣との距離を詰めた

「はああつ!断・骨・剣!!」

ズバツ

ザシュツ

ズドン!!

最後に1匹に三連撃を食らわし魔獣は消えた

「ふう、やったわね!」

スタッフフロッドを背中にしまいヨシユアにVサインをするエステル

「まったく、おき楽だね君は」

ヨシユアは苦笑いをしながら返事を返した、その返事にエステルは可愛らしく頬を膨らませ

「なによ！ヨシユアだって苦戦してたくせに」

「それはそれ。さあ速く戻ろうか今日は兄さんが帰ってくるはずだから」

ヨシユアの言葉に先程まで頬を膨らましていたエステルはとたんに笑顔になった

「そうだった、今日はリュウ兄が帰ってくるんだった！！。速く戻るわよ！」

エステルは踵を返してきた道を走っていった

「はあゝ・・・まったく」

ヨシユアは試験達成内容の箱を持ちエステルを追いかけた

「で、リュウが帰ってくるのを思い出し箱をすっぱかして帰ってきたと」

遊撃士教会・・・通称ブレイサー・ギルドといわれるこの場所の2階で銀色の長い髪を三つ編みで整え大胆な服装をしている女性、彼女は>>銀閃<<の二つ名を持つC級遊撃士シェラザード・ハーヴェイである

その床に正座されてるエステルとそれを苦笑いしているヨシユアの姿があった

「ううゝ、ごめんなさいシェラ姉」

頭を垂れながら反省しているエステルに

「君はもつと周りを見るべきだね」

さらに追い討ちをかけるヨシユア

「何よ！ヨシユアだってリュウ兄に勝てないくせに！」

その言葉にヨシユアとシェラが溜息をついた

「あのね、兄さんに勝つには父さん以上に強くならないといけないんだよ」

「そうよねゝ、先生でも勝てるか微妙なのにそれに勝てなんて・・・まったくこの娘は」

「ううゝゝ」

ヨシユアとシェラの説明が最もな理由で反論できないエステルはさらに頭が垂れた

「まあ、それはともかく」

シェラが2人の目の前に移動すると箱の中身を渡した

「シェラ姉・・・これって！」

「コホンツ、エステル・ブライト、ヨシユア・ブライト、本日を持って両名を準遊撃士に任命する。両名は遊撃士の名に恥じぬよう正義を貫き人々を守るように」

シェラは真面目な顔で言った後にウインクをして

「おめでとう2人共、今日から同じ職場の仲間よ」

それまでポカーンとした顔をしていたエステルがワナワナと体を震わせ

「やったー！やったわよヨシユア！」

「ブレイサーか・・・まさかこんな未来に行くなんて」

2人が喜んでいると

「じゃあ私は仕事が溜まってるからもう行くわね」

シェラは軽く手を振り階段を下りた。エステル達が外に出ると

「おーい、早くこいよ」

青い髪の少年と

「ま、待つてよー！」

茶髪の少年がいた

「あれ？あなたたち」

エステルが近づくと

「げげっ！エステル！？」

「あ、ヨシユアお兄ちゃん」

エステルは溜息をつきながら

「失礼ね。げげっ！ては何よ、急いでるみたいだけど何処か遊びにいくつもり？外は魔獣がいるから気お付けなさいよ」

すると青髪の少年はすかしたように笑い

「ふんっ！オシナがオトコのやることに口をだすなよ。ブレイサーでも無いくせに」

ここで言い返すのがエステルなのだが何故か笑い

「ふっふっふ……甘い！甘すぎるわよルック！バーゼル農園の

ミルクより甘いわ!」

青髪の少年・・・ルックは啞然とした顔をし

「へっ?・・・まさか!」

「ホホ、つい先程をもちまして私遊撃士資格を得ましたの。わたくし正真正銘のブ・レ・イ・サ・あ」

エステルは何処か勝ち誇ったよに言う

「まだ見習いになったばかりだから威張るほどじゃないけどね」

ヨシユアがそう言い改めると

「そこ、水をささない」

エステルがジト目で注意する

「わあすごい!すごい!お姉ちゃんたち、やったね」

茶髪の少年が目を輝かしながら喜ぶと

「あー、バットはいい子ね。小生意気な悪ガキや捻くれたお兄さんと違って」

エステルは笑顔になりながら茶髪の少年・・・パットの頭を撫でた。その後少年達はエステル達から逃げるように走り去り雑貨屋でカシウスの使いをした後家に帰ろうとすると

「エステル、ヨシユア！いいところに見つけたは！」

名前を呼ばれ振り向くと金髪の若い女性が走ってきた

「あれ？アイナさん？」

「どうしたんですか？やけに慌てていますが？」

「ルックとパットって言う少年を知っているわね」

アイナが真剣な表情をしているので2人は頷くと

「実は・・・2人して北の郊外にある《翡翠の塔》にいったのよ」

翡翠の塔

エステルとヨシユアはアイナから説明を聞きアイナがカシウスを呼びに行く所を2人が行くといい緊急要請として2人は翡翠の塔に向かい今入り口にいた

「道中にいなかったとなると中に入ったね」

真剣な表情でヨシユアが情報を整理し

「中に入ろう」

「そうね」

エステル達は翡翠の塔の中に入った、すると小声だがルックとパツクの声が聞こえた

「やっぱりいたね」

ヨシユアが溜息をつくとエステルが前に出て

「すう・・・、ルック、パツク！聞こえるなら返事しなさい！！」

塔全域に広がると思っほどの大声を上げて少年達も名前を呼ぶが

・・・

返事がないただのしかば・・・どうやら返事を返さないみたいだ

「あ、あんにやろども。あたしを無視するつもり！？」

「いやもしかしたら2階に上がったのかもしれない、急ごう」

エステル達は急いで2階に移動すると

「うわああああ」

「た、たすけてええええええ」

ルックとパットの悲鳴が聞こえてきた

「ヨシユア！！」

「了解！」

エステルとヨシユアが共にに駆け出した。今にも襲おうとしている5匹の魔獣をエステルが1匹、ヨシユアが1匹、奇襲で倒した

「あんた達下がってなさい！」

「直ぐに片付けるからね！」

エステルとヨシユアは戦闘体制を整えた。ヨシユアは速さを武器に魔獣を翻弄している間にエステルがアーツを準備をおわらし

「エアストライク！」

エステルが風の刃を一体の魔獣に向けて放ち怯んだ隙にヨシユアが仕留めた

「残り2！」

エステルがそう言いスタッフロッドを一回転し遠心力からくる力を利用し魔獣に叩き付けた。攻撃硬直で隙ができ残り1体の魔獣がエステルに攻撃しようとしたが

「ソウルブラー！」

時の刃がエステルを襲おうとしていた魔獣に当たり怯んだ所を

「てりゃああ！！！」

エステルが思いっきり叩き付けた

「ちよろいちよろい！」

スタツフロツドをグルグル回しVサインをするエステルにヨシユアは苦笑いした・・・この瞬間誰もが油断した一瞬の隙に

「グガアアアアア」

一体の魔獣がエステルを背後から奇襲しようとしていた

「エステル！！」

ヨシユアは魔獣の反応に遅れ既に間に合わなく、エステルも気づいたがギラついた牙を覗かした魔獣に思考が一瞬停止した。その隙を逃さずエステルの喉笛を噛み千切ろうとした・・・しかし魔獣に一陣の風が流れた、すると魔獣の体はバラバラに切り裂かれた。風が流れた方を皆が見ると黒で統一された服装、白金に輝くしろがね片刃の剣、そして何よりも特徴的なのが隼を思わされる鋭い眼光である

「リュウ兄！」

その助けてもらった人物が自分を知る中で1、2を争う強く信頼できる人物であるからエステルは喜んだ

「・・・エステル」

リュウはエステルの方を向き

「戦闘後の注意が疎かだ、次はないと思え」

次にヨシュアの方を向き

「お前もだ、ぬるま湯に浸かりすぎ平和ボケしたか」

リュウの厳しい評価に2人はシュンとするが、リュウはエステル
の頭に手を置き撫でた

「精進しろ」

ヨシュアにも同じ行動をとり

「帰るぞ」

リュウはもときた道に向い歩くと

「すげえええ！」

「・・・かつこいい」

ルックとパックはリュウの圧倒的までの力、その言動、立ち振る舞
いに憧れを抱き目を輝かせリュウについて行った

「わかったエステル、あれぐらいなら多分目を瞑ってもできるはず
だよ。それに勝つのは今じゃ不可能だね」

「ううゝゝ、悪かったわよ・・・でもいつかリュウ兄をギャフン
って言わしてやる!!」

エステルは大声を出しそう宣言しリュウの後を追った。エステルの

声が聞こえたリュウは僅かだが口元が微笑んでいた

mission8 齒車（後書き）

更新が遅れてました・・・orz

モンハン3rdを初日に買ってずっと大学の友人達とやってまして小説のほうを疎かにしてました（ついでに今の装備はフルシルバーソルです）

PVが10,000超えてました本当に読者の方々には感謝しています。

これからもどうか宜しくお願いします

mission9 思い

「かんぱい」

エステル達が翡翠の塔から帰還しギルドへ報告（その時ルックとパットは保護者の方々から大目玉をくらっていた）した後エステルとヨシユアの準遊撃士任命＆初依頼達成のお祝いをブライト家でしていた

「まったく、戦闘後に油断したらダメってあれほど口すっぱく言っていたのにあの娘は」

酒が入り愚痴をこぼし始めたシエラに

「そう言うな、お前さんだって始めての依頼はそうだっただろ？」

シエラと一緒に酒を飲んでいるカシウスが今日の出来事をダシにしておりエステルとヨシユアはそれを苦笑いしながら食事をしていた

それから十分後

「あははゝエステル、一緒に飲みなさい」

酒に飲まれたダメ人間がいた

「ダメよ、わたしたちまだ未成年なんだから」

エステルがきつぱり断ると

「ぶ〜な・ら、ヨシユア！一緒に飲みましょ。飲んでくれたらお姉さんぬ・い・で・あ・げ・る」

そう言いながらスカートの裾を持ち上げようとしたその時シエラは悪寒を感じた。冷や汗を流しながら振り向くとそこには・・・般若がいた

「シエラちゃん・・・」

聖母のような笑み・・・しかしその後ろには般若がおり体は何か黒いオーラ見たいなので包まれてるように見え、シエラは歯をカチカチ鳴らし体をガクガク震わせカシウスは部屋の隅でブツブツ言っており、リュウもあの邪神以上の威圧感に背中に冷たい汗が流れていた

「お母さん凄い！！」

その場の空気なぞ露知らずエステルはこの混沌^{カオス}の場を一言で治まったのを憧れに近い目でレナを見ていた

「あたしもお母さんみたいになりたいな」

「ふふふ、大丈夫よ。きっとエステルにもできるわ」

レナみたいな女性が出来上がるのにカシウスとシエラは部屋の隅で奥歯をガタガタいわせながら縮こまり、リュウは溜息をつきヨシユアは冷や汗を流しながら苦笑いをしていた

ブライト家・テラス

お祝いが終わり皆が寝静まっ　と深い夜1人の男が月を見上げながら
ゆっくりとワインの入ったグラスを傾け味わっていると

「カシウスか……」

何も無い暗い闇の空間そこから1人のダンディーな男性があらわれた

「やれやれ……これでも本気で気配をけしていたんだぞ、リュウ」

「消し方は完璧だ……だが消しすぎだ」

よく聞く話で氣を扱う者は人に流れている氣を感じ居場所を察知すると聞きますがその道の達人は自然界に流れる氣を感じその流れを読み不自然にいる何かを見つけることが出来る。リュウもそれではないがそれと似たことができるのでカシウスを見つけることができた

「どうだ一杯やらないか？」

カシウスは後ろに回していた手からワインのボトルとワイングラスをもっていた

「……」

リュウは黙っていたがカシウスはその沈黙を肯定ととり席に座り開いている方のワインを自分のワイングラスに注ぎグラスをリュウの

方へ向け

「乾杯」

「・・・・・・・・」

チンッ

とグラスとグラスが軽く響く心地いい音が聞こえた後2人はワインを楽しんだ。そして数分後先の口を開いたのはカシウスだった

「・・・・・・・・明日帝国に行く」

カシウスは先程のリユウのように月を見上げながら言つと

「・・・・・・・・帝国ギルド襲撃の件・・・・・・・・だな」

リユウの返答にカシウスはすぐさま真剣かつ若干殺気の籠った眼でリユウを見ていたが内心既にしてしていると感じていた

「北の猟兵団の動きが活発だったが・・・・・・・・」

「ギルド内や上層部でも箝口令かんこうれいが直ぐにでたんだがな・・・・・・・・だがお前ならとは思ってたがな」

そう言いカシウスはグラスに入っていたワインを一気飲みした

「まだ後ろの組織は分らないが、恐らく《結社》だろ」

「・・・・・・・・奴等がそれをする利益はなんだ」

今リュウが思っている疑問・・・それは黒幕の利益である。帝国ギルドを襲撃しても猟兵団に金が飛んでいき、こちらに入ってくる金はないのである。もし狙いがカシウスを帝国におびき出しリベールを手薄にするのが目的でもリベール王国は大陸有数の高位遊撃士が多数おり軍も帝国と停戦に持ち込むほどの猛者が多くその穴も簡単に埋まるからである

「わからん・・・いろいろ予測はしているが、いかんせん情報が少なすぎる」

グラスにワインを注ぎそれを飲み落ち着きを取り戻すカシウス・・・
・だが

「・・・レナさんはどうするつもりだ」

リュウの疑問、それはレナの安否である。リュウ自身もクロードイア殿下の護衛や情報収集で忙しくカシウスも国外に出張でレナの護衛がいなくなるのだ。エステルは戦力外、ヨシユアもいるが2人を護りながらは流石に無理、もしそこを狙われ人質にでも取られたらカシウスは身動きがとれなくなるのだ

「それはもう考えてある。・・・エステル達には俺が帝国に行く時にリベールを一周させようと考えている、その時にボースのラッセル博士の家に居候させてもらうつもりだ。あの家は今孫のティータちゃんだけだしな」

それを聞きリュウは黙ってワインを飲み始めた

「当分の間はリベールにいるのか？」

「ルーアンで護衛がある」

そう答えるとカシウスは何処かホツとした顔をしていた

「なら俺の変わりにあの子達を手助けしてくれないか？万が一エステル達だけでは対処できない問題が出来たら手を貸してやって欲しい。なに！ギルドの方には俺が話しをつけておく」

カシウスはリュウの肩を組んだ。リュウは沈黙していたがその目を何処か安心できる眼差しでありほんの僅かだが口元が微笑んでおり首を縦に振った

「そうか・・・ありがとう」

そして翌朝リュウはルーアン、カシウスは帝国に向う飛行船に乗った。その数日後にリュウの元へ一通の手紙が届いた。その内容はカシウスの乗っていた飛行船「リンデ号」の消息が途絶えた報告だった

mission9 思い（後書き）

明けましておめでとうございます。

今回は短めで申し訳ありませんがなるべく早めの更新をしようと努力いたします

さてfallcomさんが今やっている軌跡フェスタに小説部門があったのでそこに投稿しようか迷っています。もしだすならこの作品をと並列して考えていたオリジナル主人公のモノを出そうとおもいます（まあ1200文字ですから短編になってしまいますが）

では読んでくれた皆様よいお年を

m i s s i o n 1 0 武術大会 前編（前書き）

投稿が遅れてスイマセンでした

mission 10 武術大会 前編

潮の香りが漂う街道に石畳の舗装された森の中へと続く道を1人の男性が歩いていた。

太陽が照らす道を歩く男性、その周りにある生い茂っている草や光が余り届かなく薄暗い森の中には魔獣がいた。しかし何故か魔獣達はその男性を襲おうとはせず逆に怯えた雰囲気を出していた。

森の中を進んで行くと大きな建物に門が見えてきた、門の前には警備員らしき人物が立っており森を抜けてきた男性に声をかけた

「ここは関係者以外立ち入り禁止だ・・・ああ君か、よく来てくれたね。」

警備員は森から来た男性に注意しようとしたがその男性がある人物と気がつき態度を改めた

「よく来てくれたね、君が来てくれたら此処の安全が保障されたのと同じ義だ。」

警備員は男性の訪問を歓迎し門の鍵を開けた

「さあ入ってくれ。」

男性は警備員に軽く頭を下げ門の中へと入った。もうお気づきだろと思うが男性こそ我らが誇る超忍リュウ・ハヤブサであり大きな建物はジェニス王立学園である

リュウは門から真っ直ぐ歩き正面の建物に入った。建物の中に入り正面の受付カウンターで作業していた女性がリュウの方を向いた

「あらリュウさん、こんにちは。今日はどうされましたか？」

「コリンズ殿は・・・」

「学園長なら学園長室にあります。」

リュウは軽く頭を下げた後学園長室に向った。リュウはある部屋の前に立っていたそのプレートには学園長室と書かれていた、リュウはドアを4回ノックした

「はいりなさい。」

部屋の中から声が聞こえリュウは部屋の中へと入った。部屋の中へと入ると椅子に座って書類を見ていた学園長が顔を上げた

「おお、リュウ君よくきてくれた。立ち話もなんじゃ座りなさい。」

リュウは学園長の指示通り黒い革張りのソファに腰を下ろした。学園長が紅茶の準備をし終えた後に目の前のソファに腰を下ろした

「君が来てくれて助かったよ。椅子に座って書類仕事は年寄りには腰によくないからの。」

と笑いながら学園長が言っているとリュウも微かにだが笑っていた

「・・・うむ、初めて合った時に比べると大分表情が豊かになったの。」

「あの頃はまだ心の方に余裕が無かったので。」

紅茶を飲み一息ついた所で無表情で答え

「あの頃の君は誰にも心を許していなかったからの。」

「……だが」

リュウの顔が真剣になった……でも

「ここの奴等は心が綺麗すぎる。」

どこか温かみのある顔だった。その表情を見た学園長はどこか……そう、まるで自分の息子の成長を嬉しく思う親の顔であった

それから世間話を話していると鐘の音が聞こえ壁掛けの時計を見ると16時になっていた

「やれやれ、もうこんな時間か。楽しい時間が過ぎるのは早いのに。」

学園長が紅茶セットを片付け始めた

「あの頃は君もメイベル君もギルバート君もいい顔をしておった。」

片付けをしている間にリュウは帰る支度をしていた。部屋を出ようとドアに向くと

「またきなさい、今度はメイベル君達も呼んでお茶会でも開こうかの。」

学園長が優しい笑みを浮かべているとリュウは頭を下げ部屋を後にした

クラブハウス・テラス

学園長との世間話を終えたリュウは校舎から出ると空が赤くなっていた。そのまま門に向おうとしたが

「リュウさん。」

名前を呼ばれ声が聞こえた方を向くいたすると3人組の少年少女がいた

「どうしたクローゼ？・・・あ、どもっす！リュウさん。」

「クローゼどうしたの・・・ってリュウさんじゃないですか！ここにちは。」

最初に声をかけた少女・・・クローゼが嬉しそうに近づいてきて、元気そうな少年と髪をポニーテールで纏めたメガネ少女がいた

「ハンスに・・・ジルか。」

「今日はどうして学院に？」

ポニーテールの少女・・・ジルが首を傾げ聞くと

「学園長に入用だ。」

と簡素に答えた。だが3人は無愛想な答えに嫌な顔をしなかった

「今からテラスでお茶しようと思っているんですけどリュウさんもどうですか？」

ジルの提案を断ろうとしたリュウだが

「おい・・・あの入って。」

「ん？・・・ってリュウ・ハヤブサさん本人か！」

ざわ・・・ざわ・・・と周りの生徒達がリュウの方を見始め

「生で見れるなんて・・・もう（ry」

「ふむ・・・あの御方が例の・・・」

女性からは色々な視線を感じて嫌な汗が流れるリュウであった

「・・・ハンス。」

「なんですか？」

「何故・・・こんなに騒がれる」

「そりゃあんな伝説を起こした本人なんですから」

ハンスは何を今更な、見たいな顔をしていた

伝説の内容

「さあ武術大会もいよいよ決勝戦！！。そのコマまで勝ち進んできた猛者は・・・北、紅の組・・・王国軍、ハーケン門司令官、モルガン將軍！！」

観客の声が一気に大きくなり門が開きハルバートを持ったモルガン將軍が中央まで出てきた

「南、蒼の組・・・ジエニス王立学園、生徒会副会長、リュウ・ハヤブサ！！」

モルガン將軍よりも観客の声が何倍も大きかった。そうリュウはジエニス王立学園に入学（カシウスと女王陛下に無理矢理に近い内容で言いくるめられ入学）し1年の時より用いる才能を發揮させ同じクラスだった現ボース市長メイベルと共に生徒会入り。二年に上がると共にメイベルが生徒会長、リュウが副会長を務めた。ちなみにギルバートは2年生の時に生徒会選挙で何とか書記に選ばれた。そして武術大会が近づいてきたある日にメイベルが突然言い出した

「ねえリュウ、貴方武術大会にでない？」

「・・・なに。」

授業が終わり放課後、生徒会室で作業をしていた生徒会一同。上座の椅子に座っていたメイベルは手にあるチラシを持っていた

「断る。この忙しい時期に何を言っている」

今の学園は卒業式の内容や学園祭の準備で大忙しなのである。その中一応作業しながらも武術大会参加募集のチラシをみていたのだ

「なら生徒会からの出し物を貴方の武術大会参加にしましょう。ギルバート、まだ出し物を決まっていなかったわよね？」

ギルバートはメモ帳を取り出しパラパラ捲りながら確認すると

「候補に男装女装喫茶、一般入場者のスタンプラリー、学園説明補助などがありますがどうするんですか？」

「全部却下よ。」

「・・・・・・は？」

ギルバートはメイベルの言葉に目を点にして間抜けな声を出した

「だから却・下よ。」

頭に手置き溜息を漏らすギルバートと同じく溜息を漏らす生徒会一同。非常に優秀で生徒や先生からも人望もあるメイベルだがどこか突拍子な所や予想外な行動が生徒会一同の頭を悩ます種だった

「無茶を言つなメイベル。これまでの日程でやっとな3択に絞ったん

だぞ、これ以上の日数は稼げない。」

リュウがメイベルにそう言つと

「なら会長権限で男装女装喫茶にするわよ。」

笑顔でそう言つと男性生徒会メンバーが顔を引きつらせ

「あとギルバートはゴスロリメイドね。」

ギルバートの顔が真っ青になりリュウの方を向き十八番の土下座をした

「お願いしますお願いしますリュウ様！どうか武術大会にてください！本当にお願いします」

額を床にぶつける程激しい土下座にリュウは溜息をついた

そして武術大会本戦

「皆様いよいよ武術大会本戦の開幕です！本戦に勝ち上がってきたメンバーはどれも強者つわものばかりです！では本戦1回戦北、紅の組・・・王国軍、第8師団所属ロウ中尉以下四名のチーム！」

「南、蒼の組・・・ジェニス王立学園、生徒会副会長リュウ・ハヤブサー！」

ジェニス学園の生徒、先生達が観客席で声援を飛ばしていた。リュウはギルバートの姿が余りにも哀れで武術大会に参加、予選を難なく突破（武器はトンファのみ）し本戦に出場した

「両チーム定位置についてください」

王国軍チーム4人は隊長を前、他3名は横一列の陣形をとった。対するリュウは中央に立ちトンファ―を構えず自然体でいた。その服装もきた当時と同じ忍装束でマスクをしていないものの中のインナーで口元を隠していた

「では試合開始!!」

合図と共に後衛の三人は銃を構え狙おうとしたが既に目の前にリュウがおり兵士Aが回し蹴りで1人が腹を蹴られ後ろに飛んだ

「てややややや!!」

横にいた兵士Bが模擬銃剣で刺そうとするのを躲し、トンファ―で顎先を殴ると白目を向き倒れた。兵士Cが発砲した弾をトンファ―で弾き返しながら接近しようとしたが咄嗟にバクステップした、するとさつきまでリュウにいた場所にロウ中尉の模擬刀が空を切った。そこから追撃しようとしたロウ中尉がリュウに向って振りかぶるとリュウはすぐさまロウ中尉の懐に入りトンファ―の先端を鳩尾に叩いた。するとロウ中尉は体くの字にした後地面に倒れた。隊長が倒れたことにより慌てた兵士Cは一瞬だがリュウから目を逸らしその間に後ろに回りこまれ意識を刈り取られた。その間実に3分

「し、勝者!リュウ・ハヤブサ!!」

観客は大声で完成を上げた。そして上へともどる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7666o/>

英雄伝説～龍の軌跡FC～

2011年3月4日21時48分発行